－文 芸－

草の丘

第 三 号

2012 年 12 月　印旛文学の会

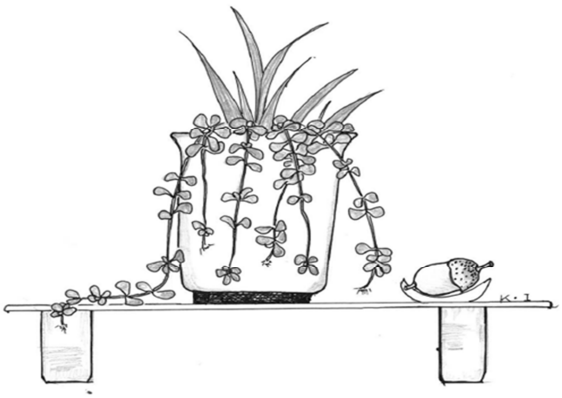
文芸

草の丘 第三号（二〇一二年 一二月）

目次　草の丘 第三号

《短編》
チームキナコの逆襲　土方　杳……一
《詩》
友よ　中川とら……一四
明日 にびいろのスカートをはいて
《短編》
幸せをあげる　いんば華子……一六
《連載ＳＦファンタジー》
アプとズコ（ＡＰＰＵ ＆ ＺＵＫＫＯ）―第三回―
香取 淳……二六
《短編》
とびうお　中川とら……五七
《小説》
続 太鼓持ち　唐瀬 光……六二

（表紙 香取 淳　カット 中川とら）



チームキナコの逆襲

土方　杳

チームキナコ、そのダサい名前が、わずか十歳だった実夏の心を深く傷つけていた。

本当は、ゴールドという名のミニバスのチームなのだけれど、ゴールドのチームカラーがどう見ても黄な粉のような色をしていること、ゴールドと呼ぶには弱すぎるチームをよそのチームがからかって言うのだ。千葉県の小さな町の中でもダントツに弱いことで有名なのだ。

しかも、チームメイト達は、その呼び名に何の感傷も持たないのだ。

そもそも、実夏は、最近転校するまでは、神奈川の田舎とはいえ、かなり強豪なチームに所属していたから尚更辛かった。

五年生の六月、神社の階段で、実夏は泣いていた。

また、試合でぼろ負けをしてしまったのだ。

「お父さんが転勤しなかったら、私は、こんな弱いチームにいなかったのに……」

実夏は、涙が止まらなかった。試合帰りに、皆が何もなかったかのように、楽しそうにしている姿も許せなかった。

誰かが、前からやってきた。気配を感じた実夏は、思わず顔を伏せていた。

「実夏ちゃん」

―懐かしいこの声は、秋雄叔父さん？

実夏が顔を上げると、秋雄叔父さんだった。身長一八五センチ、しかし体重は軽めの六五キロではあるが、三十歳にしてはスポーツマンらしい体型をしている。実夏の大好きな叔父さんだ。

「秋雄叔父さん、どうしたの？」

実夏は、涙をそっとぬぐっていた。

「実夏こそ、泣いていたのか？　俺は、お前のお父さんに呼び出されたんだよ？」

「泣いていないよ。お父さん、叔父さんが弟だから、叔父さんが、デートかも知れないのに、休みの日に呼び出したの」

秋雄は、学生の時からバスケをやっていて、実夏には前にも何度か教えてくれていた。

実夏は、秋雄叔父さんのバスケが大好きだった。難しいドリブルを教えてくれたり、シュートするときの入り方も、バスケのことを一杯教えてくれた。

秋雄は、高校時代は、県大会に出た。センターとして活躍し、兄である実夏の父の会社のバスケ部の練習試合に、何度も借り出されていた。

今は、ＳＥとして千葉の会社に勤めていた。まだ独身なので、休日はゴルフに忙しい。

本当は、今日も試合を見に来るはずだったが、急にゴルフに誘われて見に来られなかった。秋雄叔父さんは、プロゴルファーを目指しているから仕方ないのだが、実夏は秋雄叔父さんが来れば試合にも勝てたのではないかと思っていた。

だから、試合が終わって叔父さんが来ても、少しがっかりしていた。秋雄も実夏が試合を観に来て欲しいことは知っていた。だから、兄の夏樹に呼ばれても、いつもは断ることが多いのだが、今日はゴルフの終わりに駆けつけたのだ。

「秋雄叔父さんが来てくれたら、絶対勝てたのに、叔父さんが来ないから負けたのよ」

実夏は、試合の時のくやしさが蘇って来たのだ。少し涙も出てきた。神社から家への道がひどく長く感じていた。

秋雄は、実夏の小さな身体を見て、もう少し身長があればバスケが楽なのになと思っていた。

実夏は、もともとスポーツが大好きで、秋雄が社会人のバスケの試合を見せたことをきっかけに、バスケに興味を持った。

実夏が、小学校一年の時には、まず、左手でドリブルが出来るように秋雄叔父さんが教えた。左でドリブルが自由に出来るようになると、今度は右手のドリブルを教えた。

その頃になると、実夏の父の夏樹も、週末にはパスの練習に付き合ってくれた。

実夏の五歳上の姉夕夏も、少しバスケをやっていたので、ディフェンスをしてもらい、パスやドリブルの練習をした。

夏樹の会社のバスケの練習についてきて、会社の同僚たちとバスケをやって、ドリブルにもパスにも自信がついてから、始めて実夏は、ミニバスのチームに入った。だから、ミニバスのチームに入ったのは、三年生になってからだった。

実夏は、バスケの魅力に魅了された。ドリブルで相手を翻弄し、シュートを入れる快感。フェイントに相手が引っ掛かり、ドリブルで右に左に相手を抜いていく。

不思議なことに実夏は、ドリブルで抜いていく方が、ただ走るより早いのだ。

まだ、三年生だし、同級生の子よりもかなり背が低いのに、五、六年生相手にドリブルで真っ向勝負すると必ず勝っていた。シュートがもっと入るようになれば、初めて四年生がレギュラーに選ばれるかもと、他のお母さんにも言われていた。

そして、去年準レギュラーである１６番をもらい公式戦にもデビューした。チームのキャプテン西野祥子も、ドリブルやパスで、ゴール下まで運んでくれる実夏を頼りにしてくれた。

実夏のミニバス人生は、輝いていた。四年生以下の大会は、何十点取ったかわからないほどシュートが決まった。姉も母も父も秋雄叔父も、皆喜んでくれた。

なのに、父の転勤で神奈川から千葉県のＹ市に五年生の四月に転校してきた実夏は、チームきなこに入り辛い日々を送ることになった。

本当は、チーム名はゴールドなのだが、転校初日に、実夏は担任の先生にミニバスのチームの連絡先を聞いた時、ゴールドじゃなくて、キナコじゃなかったかなと、つぶやいていたのが実夏は気になっていた。

おまけに、担任の鈴木先生が少し気の毒そうな顔をして実夏を見ていた。

しかし、実夏のイメージの中のミニバスチームは、良いイメージだけだったから、気にすることをやめにした。

その日の放課後、先生に聞いた時間より、早めに母の夕子と一緒に来ていた。二十分前になると、準備のために、実夏は体育館で走りたくなっていた。

しかし、まだ、誰も体育館には現れないので、体育館の鍵が開いていない。

仕方なく、実夏は、
「おかあさん、私走って来るよ」
母の夕子は、少し困った顔をして、
「実夏、待ってよ。誰か来るかもしれないから…」
母がそう言った時には、実夏は校庭の端まで三〇〇メートルほど走っていた。わが子ながら、呆れるほどに運動がすきだなあと夕子は思う。
十分ほど経っても、一五分経っても誰も来ない。
ようやく、始まりの五分前になって、当番らしい父兄がやってきた。その父兄は、夕子に軽く会釈して、体育館の鍵を開けだした。夕子はあわてて
「実夏――――」
校庭にいる実夏を夕子は呼び戻した。夕子の声に反応して、実夏が走ってきた。子犬のように嬉しそうに、実夏が走ってきた。
体育館の中に入ると、先程の父兄が、準備を始めていた。上がっていたリングを下ろしていた。夕子は、手伝うべきか迷った。取り合えず、夕子は、
「今日は、見学に来た神崎です。お手伝いしましょうか？」
出来るだけ夕子は友好的に、言ったつもりだった…。
夕子の声が届いたのか、届かなかったのか、その父兄は、黙々と作業を続けている。実夏も何をやっていいのかわからず、夕子を見た。
「もう一度、大きな声で、あいさつして」
夕子は、実夏の背中を軽く押して前に押し出した。実夏は、夕子に振り返ると、小さくうなずき
「こんにちは、神崎実夏です」
少し小さな声ながら、きちんとあいさつできた。だが、一人黙々と来た父兄は、気付かなかった。
その時、次々と子供たちが挨拶しながら入ってきた。他の父兄も続々入ってきた。最初に入ってきた父兄もようやく気付いてくれた様だ。
「見学の人ですか？」
「はい、そうです。神崎といいます。着替えさせた方が、いいですか？」
すると横から、
「父兄代表の大塚と言います。見学の方ですよね？　今日はコーチが遅くなるので、入会の説明書持って、お帰りになったらいかがですか？」
「せっかく来たのですから、娘も、練習に参加したいのですが、どうですか？」
「わかりました、ゆかりに着替え場所聞いて下さい。ゆかり、ゆかり、

神崎さん着替えにつれていってあげて」
ゆきみさんは、少し背の高い髪の長い女の子が、
「ママわかった」
ゆかりちゃんは、まだ、着替えていない実夏に声を掛けた。
「あなたが、実夏ちゃん」
実夏がうなずくと、ゆかりちゃんは、実夏ちゃんの手を取り、一緒に走っていった。
練習開始の時間になっても、コーチらしい人は来なかった。着替えた子供たちが、ダラダラと走り始め基礎練習を始めてもやはり来ない。シュート練習が始まると、高学年の子たちは、フリースローの練習を、低学年の子は、体育館の端でドリブルの練習を始めた。
夕子が実夏はどうするか見ていると、端でドリブルの練習組に入れられていた。
実夏は、五年生だが、身長は三年生くらいしかないからだろうけど、夕子の心は複雑だった。
その後、コーチが二人バラバラにやってくると、コーチが来るたびに子供たちは集合してあいさつをしていた。
夕子は、違和感を感じていた。言葉には出さなかったが、
―前のチームと練習方法も違うし、雰囲気も違うのね。

帰り道、夕子は実夏に、
「どうだった？　練習楽しかった？」
実夏は、少し考えて、
「わからない、ドリブルの練習しかしなかったから」
「えっ、実夏ドリブル出来ないの？　そんなことないよね？」
「えーっ、出来るよ。でも、見学の子はやっちゃだめだって」
「ふーん。そうなの、じゃあ実夏の実力早く見せる機会があるといいね」
この時は、実夏も夕子もゴールドがキナコと呼ばれる弱小チームとは気付かなかった。
けれど、一週間見学している間に、実夏は実力を見せる機会はなかった。それでも、ミニバスが、実夏は続けたかった。だから、実夏は、チームゴールドに入った。
―一ヶ月が過ぎた。

実夏は、シュート練習に加わることができたが、試合形式の練習には、全然入れてもらえない。
実夏は、ミニバスの練習が平日は火曜日の夜しかないことを利用して、クラスメートとバスケを校庭で練習し始めた。

そんな日々の中、ミニバスの公式戦が、来週から始まることになった。そのときになって初めて、実夏は、紅白戦に出してもらえるようになった。

試合の前日は、ユニフォームを配られることになった。実夏は、一二番目に呼ばれた。

―１６番か、入ったばかりだし、六年生が、一杯いるからなー

と、自分を慰めた。

―きっと、六年生は強いんだ、私よりずっと強い選手がいるんだ。

家に帰る道すがら、実夏は、自分を必死に納得させようとした。というのも、これまでの練習で自分よりうまい六年生がいなかったのだ。

実夏のドリブルを、六年生の誰も止められないし、ディフェンスも、秋雄叔父さんの教え通りにやると軽く抑えられる。

しかし、大畠コーチに、レイアップシュートをするなって言われていることが納得出来ずに、紅白戦でやってしまったら、ボール出しだけしかやらせてもらえなかった。

ゴールドに入ってからの初めての試合は、１ＱＴ目、試合が開始された。

ジャンプボールして、相手のボールになって速攻で、二点入った。実夏はボール出しに走った。しかし、近くに味方が来てくれない。ボールが出せない。実夏の前にディフェンスが大柄な子だったので、股の下を通してパスを出した。しかし、味方がボールを取り損なった。相手には、速攻を決められた。

実夏は、ボール出しをして、パスを貰い六年生にパスを出すことだけを命じられていた。

けれど、パスを出す時に、自分の味方がディフェンスの後ろにいるので、バウンドパスを出しても相手に何度も取られてしまう。何度かそんなことが続き、実夏は、ボールを貰ったときに一対一になった。

ゴール下までのコースが見えた実夏は、ドリブルで右に左にかわし、レイアップシュートを決めようとした。

その時、大畠コーチの怒鳴り声が、

「実夏、何やっているパスを出せ」

その声にびっくりした実夏は、少しレイアップを失敗した。ボールは、リングをはじかれた。

だが、相手のディフェンスもあせったのだろう。実夏にファールしてくれた。フリースローのチャンスだった。

けれど、実夏の頭には、大畠コーチの怒鳴り声が響いて、一本目のシュートをはずしてしまった。二本目は何とか入れることが出来たが、実夏はショックだった。

五年生で、初めて出た公式戦は、ワンサイドゲームで負けた。そして、この時、チームゴールドが、チームキナコと陰口を叩かれていたこと知った。

その後の試合でも、実夏がチャンスに攻撃をしようとするたびに、大畠コーチに怒鳴られた。

実夏は、秋雄叔父さんに助けを求めたかった。

―大畠コーチは、勝ちたくないの？　ちびの私がパスすれば、ボール取られっ放しなんだけど、それでもいいの？

大きな疑問を抱えて、実夏は、一試合目が終わると、秋雄おじさんの元に走って行った。

「実夏、ドリブル良かったよ。相手からファール貰ってフリースローして偉かったな」

秋雄おじさんが、笑顔で来てくれたので、実夏はほっとした。

次の試合には、実夏は大畠コーチからきつく言われた。

「ドリブルするなよ、実夏」

三試合が終わって、どの試合も信じられない点数差で負けた。実夏は、負けたこともくやしいけれど、負けたことに悔しがらないチームメイトにも、実夏はがっかりしていた。

家に帰ると、仕事で応援に来られなかった父が、

「実夏、試合はどうだった。活躍出来たか？」

「う、うん、大畠コーチが、ドリブルもシュートもしちゃ駄目だって」

「え、何で、実夏にドリブルやシュートさせなくて、何をやらせる気なんだ」

実夏の父は、最後の方は、独り言のようにつぶやいていた。

「実夏が、ボール出しとパスだけ」

実夏を送ってきた秋雄叔父さんも、実夏をどう慰めていいのか、まったくわからなかった。試合で、何もせずに負ける様子を見なくてはならない。そんな残酷なことはない。

さらに、一月後の試合も同じ状況が続いた。実夏は、段々ミニバスに行くのを面倒がるようになった。

秋雄叔父さんと神社から自宅に向かう道で、四月から六月までの試合を思い返すと、更に苦いものがこみ上げてきた。

家に着くと、実夏の父が玄関で秋雄おじさんを待っていた。

「秋雄待っていたぞ、遅くにすまないな。実夏は、部屋に行っておけ」

最後に父の手が、実夏にしっしっというしぐさをしていた。

腹が立ったが、自分の部屋に行きたかった実夏は急いで階段を昇っていった。涙がこぼれそうだった。

実夏を見送った後、実夏の父夏樹は、秋雄を前に少し考え込むように、
「秋雄悪いな、リビングに来てくれるか？」
リビングは、実夏の母の夕子も心配そうにしながらいた。夏樹は、身振りで秋雄に座るように勧めた。ゆっくり秋雄は、夏樹の横に座った。
「兄貴が俺に頼み事なんて、珍しいね」
「秋雄、今回の試合もひどいものだった。それは、実夏から聞いただろう」
「聞いたよ、だから、実夏を慰めてきたよ」
「ありがとうな、でも、慰めじゃすまないんだよ。もう、あのチームに、実夏を置いて置けない」
「どうしたんだい、兄貴、いやに熱くなっているな」
「秋雄も知っていると思うけど、実夏があのチームに入ってから何もやらせてもらえないし、だからといって、チームが全然勝たないのも知っているよな」
「ああ、知っているよ。実夏がよく嘆いているから」
「だったら、これは知っているか？　つい最近知ったんだけど、うちのチームを昔、バスケの勉強会を開いて強化しようという計画を、ある父兄が立てたそうだ」
「それで、その勉強会にプロの石倉翔を呼んだことがあったんだ」
「プロってあの石倉を、すごいな。今も現役だけど、ＮＢＡの選手だったよな、一年くらい。すごいな」
「ああ、俺もすごいと思う。バスケのプロに来てもらって、子供たちの技術の向上とコーチたちの参考になると思ってだと思う。だけど、上手くいかなかった」
「え、何で、何で？」
「実は、折角、有名な石倉に来てもらうからと、Ｙ市の総合体育館で、講習会を開くことになった。だけど、どの小中学校のバスケの関係者も来たのに、ゴールドのコーチだけ来なかったんだ」
「まったくわからない」
「俺にもわからなかったから、その石倉を呼んだ人に聞いたら、ゴールドのコーチは、子供たちに上手くなって欲しいわけじゃなく、コーチしたいだけなんだよ。むしろ、子供が上手くなったら、好きなように怒鳴ったりできないから、上手くならない方がいいんだ」
実夏の父夏樹は、テーブルを、どんと叩くと、怒りが蘇ってきたのか、妻の夕子の出したビールをぐっと飲んだ。
「そんな馬鹿馬鹿しい」

と、言ってみたものの、秋雄も納得いくことがいろいろあった。
まず、実夏に新しいバスケの技術を教えても、練習や試合に使わせてくれないことが何度もあった。
夏樹は、改めて座り直すと、
「昔のことはいいんだよ。今の状況じゃ、実夏がかわいそうすぎるだろう」
「ああ、そうだな」
「で、他の父兄と話す機会があって、今までのコーチにやめてもらうことを考えているんだ」
「どうやって？」
「それが、一番問題の大畠コーチが身内に要介護者が出て、コーチを辞めざるを得ないんだ。しかも、二番目の直方コーチは、旦那が定年で、再就職の為に引越しすることになったんだ。後のコーチたちは普段も来れたり、来れなかったりで…。だから、そのかわりにお前コーチやってくれ」
「ええっ！　俺がコーチ」
「お前が、やってくれ、頼むよ」
「何で、俺がやるんだよ、兄貴がやればいいだろう」
「もちろん、俺も手助けするけど、お前の方がバスケ詳しいだろう」
「兄貴は、それでいいのか、俺は厳しいよ。知ってると思うけど…」
「ああ、頼む」
「わかった、引き受けるよ」
それからは、不思議なほど事は、とんとん拍子に進み、神崎秋雄は、ゴールドのヘッドコーチに就任した。
そして、就任早々秋雄は、
「これからは、勝てるチームを作っていこう」
と、ゴールドのメンバーの前で、そう宣言した。秋雄は、引受けたものの、どういう風に勧めればいいのか、迷っていた。
―弱小チームを、早く強くするには、どうすればいいか？　ディフェンスが先かオフェンスが先か？　それとも、両方を少しずつ教えるべきか？
秋雄は、実夏の話を思い返していた。そして、チームの弱点と強みを分析した。
次のゴールドの練習日、ひとつのテストをした。テストの結果、チームを二つに分けた。ひとつはディフェンス中心の組、もうひとつはオフェンス中心の組とに分けて練習した。
ディフェンス組の、葵、紗江、美咲、もゆ、梢、久美、百音、陽菜、雪美にはドリブルで運んでくる相手に、サイドに追い込んでボールを

奪う方法と、ゴール下で相手のシュートを外すようにタイミングよくディフェンスする方法と、ディフェンスにファールをもらって得点する相手のよけ方を徹底的に教えた。

オフェンス組は、実夏を中心にドリブルでボール運びをさせ、優奈、綺羅、ゆかり、百花、晴香には、センターのゴール下の守りとリバウンドを取らせる練習をした。

さらに、紗江と美咲と陽菜には、ドリブルの強化を秋雄は、命じた。

そんな練習が続いて一ヶ月、少しずつ皆の意識は、変わっていった。

今度は、コンビネーションの練習を一ヶ月続けた。ボール出しからシュートに持っていく方法、相手のボール出しをディフェンスする方法を何度も何度も繰り返した。紅白試合に、背の高い親たちを、ディフェンスに協力してもらった。

やっと秋雄は、練習試合をする決心をした。相手は、蕨、Y市で、びり争いをしているチームだけれど、殆どゴールドが負け越しているチームだから、絶対に最初に倒すべき相手だから…。

いつも、キナコと陰口をきいているのも彼らだから…。

試合は、ゴールドの本拠地東小学校で行われることになった。

実夏の五年生の九月に試合は行われることに決まった。

試合の日の朝、夕子は、実夏に気合の入った弁当を渡した。

「後から、皆で応援に行くからね」

家を出る実夏は、大きくうなずくと、手を振った。

今までにない程、ゴールドの応援席は一杯になっていた。一方、蕨の応援席は疎らだった。

ウォーミングアップの時間も、ゴールドのメンバーは緊張していた。実夏も、ボールが手に付かない感じがして手が震えた。

コーチの神崎秋雄が、

「皆、緊張してるな、少し大きな声出してみようか、勝つぞう、おー」

「勝つぞう、おー」

三回位叫んで、ようやく声がそろった。

互いに挨拶を交わして、試合開始の笛が鳴り響き、試合が始まった。

１ＱＴ目に四年生の１６番の百花と１５番の陽菜と１０番の実夏、５番の優奈、４番の葵が出た。ジャンプボールで優奈が、実夏にボールを上手く渡し、ドリブルで運びシュートを決めた。

蕨チームのボール出し、ディフェンスの四年生、背の高い１６番の百花が、大きく手を振っていた。相手チームに、一人ひとりディフェンスが付き、ボール出し出来ないように守った。五秒間経ち、笛が吹かれ、ゴールドのボール出しには実夏が出た。蕨の背の高い７番の凛香が立った。しかし、実夏は、すばやくフリースローラインぎりぎり

にいるもう一人の四年生陽菜にパスを出した。ディフェンスが陽菜による前にエンドラインの右に入った、と同時に、優奈がゴール下の台形の左側に入った。蕨のディフェンスは、実夏に付くべきか優奈に付くべきか一瞬迷った。陽菜は、実夏にパスする振りをして、シュートした。シュートは、はずれたが、優奈がリバウンドを取りシュートした。応援席から大きなどよめきと、拍手が起きた。

一息つくまもなく、蕨のボール出しに今度は、４番の友里香が、ドリブルの得意な１１番の帆菜にボールを出した。

ボールを受け取った帆菜が、左右を確認して走り出した途端に、１０番の実夏が、相手の右手に立ちふさがり、４番の葵が前をふさいだ。相手の４番の友里香が、ボールをもらいにきたが間に合わず、三秒経って、オーバータイムとなり、ゴールドのボールとなった。今度は、ハーフラインの近くまで来ていたので、陽菜がボール出しをして実夏がボールを受け取り、ドリブルをして、フリースローラインまで運んで来た。相手の７番の京香が、前に立った瞬間シュートモーションを掛け、相手が、ジャンプした瞬間、ピボットを踏んで、右から来た陽菜にボールをパスして、エンドラインにいた優奈にパスが出され、シュートが決まった。

蕨にも焦りの色が出てきた。いつもは、シュートどころかドリブルも出来ずに、ずるずると負けるチームキナコが、蕨に、自分たちの攻撃をさせない。

夢にも思わないことに、蕨の連中は、ボールが手に付かなくなった。

１ＱＴ目は、蕨五点に対してゴールド二〇点で、ゴールド有利のまま、２ＱＴ目が始まった。

ゴールドは、６番の紗江、７番美咲、８番もゆ、９番綺羅、１２番久美で戦った。６番の紗江がパス出しをして８番のもゆがドリブルで繋いで７番の美咲がシュートを決めた。いつもは、９番の綺羅にばかりボールを集めてシュートさせて点数を取る作戦なのだが、綺羅にボールが集まらないために誰にディフェンスに付いていいか、蕨も困っていた。２ＱＴ目にも、ゴールド二〇点を加え、蕨は一〇点を加えた。

３ＱＴには、４番葵、５番優奈、６番紗江、９番綺羅、１０番実夏が出た。

実夏は、最初、初めて３ＱＴに出た緊張感で、ドリブルをし損なった。だから、速攻を決められ、二点入れられた。そのことで、実夏は、ものすごく責任を感じた。ドリブルで速攻する時に、ディフェンスが二人来たのに、無理にシュートしようとしてボールを奪われた。相手も、足の速い４番の友里香に走らせて、５番の華絵がロングパスを投

げ、友里香が受けシュートをして、また二点追いつかれた。
ゴールドのヘッドコーチをする秋雄が、作戦タイムを取った。
「実夏、何を焦っているんだよ。３ＱＴは、お前だけでボール運びをする必要ないだろ。紗江もいるし、葵もいる。優奈に任せることも必要だ。わかるか、お前一人でやる必要はない」
「はい、わかりました」
実夏は、うなだれた。すると、葵が、
「実夏は、足が速いんだから、さっき蕨がやった速攻返してやろう」
実夏は、葵の励ましに気持ちを切り替えた。
タイムが終わると、ゴールドのボール出しだ。６番の紗江が、９番綺羅にパスをし、綺羅はロングパスで実夏に投げた。４番の葵が綺羅の横にいたので、葵にパスを出すと見せかけて実夏に投げたので、蕨のディフェンスは追いつけず二点を返した。
こうして、実夏は立ち直るきっかけになった。
終わってみれば、３ＱＴも一五点ゴールドが稼ぎ、蕨も一〇点を稼いだものの、かなりの大差が付いていた。
４ＱＴは、蕨は３ＱＴと同じメンバーだったが、１０番実夏、１１番梢、１３番久美、１４番百音、１７番晴香が出た。１０番と１１番、１３番は五年生だけど、１４番は四年生、１７番は三年生だ。蕨にとって、とても屈辱的だったに違いない。
けれど、いざ試合が始まってみれば、１０番の実夏にドリブルでボールを運ばれ、１７番の晴香にシュートを決められ、１０番のドリブルを警戒すると、１１番梢にドリブルで運ばれて、１４番の百音にミドルシュートを決められる。ディフェンスでも、１１番の梢と１３番の久美に、一番背の高い蕨の７番凛香が追い詰められてボールを落とし、ルーズボールになったところを、１０番の実夏にボールを盗られ、ドリブルから速攻を決められる。
最早、どんな攻撃も立て直すことが出来ずに、蕨は五〇点の差を付けられて負けてしまった。
蕨の選手は泣いていた。蕨のコーチは、試合中も大声で怒鳴っていた。声が枯れるほど怒鳴って、チームゴールドに、いや自分達が馬鹿にしていたチームキナコに負けたことが納得いかない様子で、挨拶もそこそこに帰ってしまった。
実夏は、うれしかった。それは、今までに感じたことのない喜びだった。チームの皆でボールを運び、シュートを決めて、キナコ、キナコと陰口をきいていた蕨相手に完勝したのだ。
秋雄叔父さんが、泣いていた。お父さんも、お母さんも、そして、実夏も泣いていた。

「ありがとう、秋雄叔父さん」
秋雄叔父さんは、ただ、うなずいていた。
「よかったな、実夏。すごかったぞ。お前の気持ちが、皆を引っ張って来たんだ」
確かにそうだった。実夏以外の部員は、負けることに慣れていた。だから、最初、他の部員はやる気もなく、ダラダラしていた。
けれど、実夏はあきらめなかった。同級生の三人を誘い、放課後ドリブルの練習に付き合った。左手でドリブル出来るようにも手伝った。皆少しずつではあるけれど、左手でもドリブルが出来るようになった。
やがて、それが六年生にも四年生にも三年生にも広がり、チームゴールドは強くなった。
それに、練習日以外でも、皆が、頑張ることによって短期間で上達した。
さらに、秋雄コーチも決して、怒鳴るだけのコーチではなかった。どんな子にも丁寧に、わかるまで教えたことが、功を奏したのだ。
「実夏、次は緑ヶ丘とやって勝てるようにがんばろう」
「叔父さん、緑ヶ丘は、Y市一強いチームだよ」
「知ってるよ、Y市の一番じゃなく、千葉県の一番になろう」
「えー！　すごいことをいうね」
「もう、チームゴールドは、キナコじゃない。弱小チームと馬鹿にした連中に、逆襲しよう」
「叔父さん、チームキナコの逆襲だね」
「そうだよ。チームキナコの逆襲はこれからだよ」
実夏は笑った。秋雄叔父さんも、チームキナコの面々が、全員で大声で笑った。

〈了〉

友よ

中川　とら

友よ
今日の生活に　乾杯

貧しくも笑って過ごした　今日に
厄介な人間の縺れに負けなかった　今日に
淋しき人を励ました　今日に

明日もまた
課題ある生活に　精一杯の汗をながそう
そうして
一日が終わったら
互の健闘に拍手を送り
また
元気いっぱいの乾杯をしよう

明日　にびいろのスカートをはいて

中川　とら

小雨降る　思い出の小径は
今日　淡紫にけむっている
あなたがよく暗誦していた
あの詩の一節を
今　私が口ずさみながら行く

悲運と人は言うけれど
あなたが生きた青春は
何ものにも染まらない　稀有な光
弾む生命力
はきはきとした振る舞い
黒く豊かな髪をいつも編んで
聡明な額が輝いていた

成熟せずして逝ってしまったあなた
あの青葉の繁みに
愛くるしいあなたが　隠れているようで
目をくるくるさせたしたり顔のあなたが
そこから　とび出してくるようで
思わず足を止めてしまう

明日　私は
あなたの好きな
にびいろのスカートをはいて
あなたがこよなく愛していた故郷のお家を
草笛をふきながら　たずねて行きましょう

幸せをあげる

いんば華子

真希（まき）ちゃん、お久しぶりです。そして、結婚おめでとう。せっかくご招待いただきましたが、披露宴は欠席いたします。

幼馴染で仲良しだった真希ちゃんが五月に結婚することになった。相手は大学で出会った人で、今は都内の商社に勤めているそうだ。真希ちゃんよかったわね、元気そうだし、旦那さんは結構な大企業にお勤めだそうよ。と、母親に何度も聞かされた。はいはい、と受け流しながらも、生まれてから一緒に育った同級生の結婚の報告には多少の焦りを感じる。学生時代の友人にも結婚して子どもまでいる人が増えた。まあ、二十六にもなれば久しぶりに話を聞くと名字が変わっている人がいる。

田舎の結婚は二極化が激しい。早い子は成人式にもうしっかり歩きまわる子連れてきていた。早い子は早すぎるし、私みたいにいつまでも田舎で燻っているのは晩婚か、一生一人で過ごすことになるのだろう。特に結婚願望もない、結婚生活ができるほどの人がいるなら、世間一般の慣例に倣ってみようかなという程度だ。同級生の間で真希ちゃんはその中でも特例だろう。普通の結婚だ。けれども真希ちゃんは、中二の時にお父さんの転勤で隣県のちょっと都会の町に引っ越した。私達が一緒に過ごした時間は子どもである時だった。それまで私

と真希ちゃんは、大がいくつ付いても足りないくらいの親友だった。

「え？　いいの？　その友達の披露宴行かなくて。友達だったんでしょ？」

「いいの。決めたの。それに次の日から旅行でしょ。朝早いし、せっかく休みが一緒に取れたんだから」

付き合い始めて十一年になる治（おさむ）の家に遊びに行って、真希ちゃんの話をした。部屋のクッション（私の定位置）に座って、ベッドに腰掛けた治に向かう。治は真希ちゃんと入れ替わるように我が家のすぐ近くに引っ越してきた。こんな田舎に、と思ったが、ちょうど駅ができてマツキヨやスーパーもできて、のっぺりとした中学校の周辺の風景が変わり始めたころだった。都心へのアクセスが良くなり、マイホームは多少不便でも静かで安心して子育てができた方がいいという新しい思考と田舎への憧れを持った人々がやってきたのだ。中学校の周りは戸建ての団地やマンションに囲まれた。ニュータウンには子どものいる若い家族が集まり始め、治は憧れの都会からやってきた男の子だったのだ。私には治がとてつもなくきらきらして見えた。中三の体育祭で意気投合し、付き合い始めた。それからこの関係をやめるメリットもデメリットも無いから一緒にいる。治は大学卒業後、就職氷河期下で何とか正社員の口を見つけ、営業職で外回りをしながら趣味の絵画を続けている。それでも仕事が忙しくて、最近は鑑賞するばかりだ。

東北の方で展示会があるからと、二人で休みを合わせてとった。私はというと、高校卒業と同時にフリーター。当時の私は治よりも本気で絵が描きたかったはずなのに、飲食店のバイトと家の家事に追われている。両親は定年直前の共働きで、うちにはあと大学生と高校生の弟がいるのだ。

「真希ちゃんが結婚か。時間は確実に経っているもんだな」

「幼馴染だとなおさらね。だから手紙出すよ。せっかく私にも連絡くれたし」

「綾子（あやこ）字汚いから丁寧に書けよ。代筆しようか？」

「していただかなくても書けます！　書こうと思えば情熱も詰まりに詰まった芸術作品並みなんだからね」

ちょっと力を入れて腕を振り上げたのに、治は私の拳をいとも簡単に掌で包んだ。あっ、と思った時には抱き寄せられてキスしていた。治は昔から不意にキスをするのが好きだ。そして、「本当に変わんねえな」と愛おしそうに囁くのだ。私はこの変化のない関係と生活に安寧を感じ、静かに目を閉じる。

「いずれ治君と結婚するんでしょ、ねーちゃん」
高校生の爆弾発言はときどき怖い。父、母、弟二人が揃っての夕飯の時だった。徐(おもむろ)に一番下の弟が話し始めた。家族が全員揃っているときにいう話題！　空気読めよ。年頃の男のくせにこんな話題、こっ恥ずかしくないのかよ。私がだんまりになっていると、母が口を開いた。
「そうね、綾子がいいなら、そろそろ。そういう話題は二人にはないの？」
「私のことはいいじゃない。真希ちゃんの話があったからって、同じ所に上げないでよ」
目を合わせずに食事を続けた。うちの家族は、お互いを下手に刺激しないという暗黙の了解がある。和を乱さないという最大目標が我が家にはあり、夕飯は家にいる者すべてが揃ってからというのから始まって、同じテレビ番組を見る時は一か所に集まることも鉄則だ。電気代の節約にもなっていかにも家族団欒の様子だが、それは和を重んじていた祖母がいたからだ。その祖母も三年前に亡くなり、私達には形骸化した習慣だけが残った。家族といるとき、一人で勝手に自室に戻ることはしにくい。早く部屋に戻りたくとも、家族という雰囲気に縛られてその場から動きにくくなる。そしてまた、誰かが席を外さないといけないような雰囲気も作り出してはいけない。そうでなければ、和が乱れるからだ。居心地が悪くなるようなことを家族の中からは出さない。しかし、外部のこととなると別だ。今回みたいに、ご近所や昔の知り合いの噂を聞いてくると、今日のような具合で探り合いのような、電球を換えている人の踏み台を揺らすようなことを始める。
「いや、俺さ、結婚するなら早いうちにしたくてさ～。でもねーちゃん結婚してないとしづらいって言うか」
高校生の恋愛なんて儚いものだ。友人たちの一過性の恋愛なんていくつ見てきたか。バカじゃないの？　今だけだよ。くだらない幻想だったって気づくのは一ヶ月後か明日か。
心の中で悪態をつきながら、先週セーラー服を着てがちがちに緊張してやってきた女の子の顔を思い出した。弟の彼女だ。
「…順番があるからな」
父がシシャモをかじりながらぼそっとこぼした。
「やっぱそうだよね～」
父はあまり多くを話さないが、下の弟とはそりが合う。私はこのミスマッチにときどき激しく苛立つ。
「私は、治とは結婚しようとか、どうなろうとか、今も昔も考えてな

いから。私にも人生のペースってものがあるんだから、せき立てるとかしないでくださーい！」
「でもねーちゃん旅行行くって言ってたじゃん」
「ちょっと！」
旅行に誰と行くかは弟たちには何だかんだ知られていたが、両親には言っていなかった。なんとなく気後れしていた。でも旅行なんて何度も行っているし、今回も特に表だって言ってはいなかった。
「ごちそさま」
下の弟に掴みかかっていると、父よりも口数の少ない上の弟が席を立ち、二階にある自室へ戻っていった。
「ふふふ、お兄ちゃん奥手だから。旅行はいいけど、誰と行くかぐらいお母さんに言いなさい。実家に住んでいるんだから」
大学生の弟のへたれた姿を微笑ましく感じながら、母はしっかりと私に釘を刺す。二十六になっても、実家暮らしを続けていれば立派な大きな子どもになってしまう。バイトといえども働いていて、けれども家に帰ると両親がいる。私は自律した大人の一方で、子どもとしての義務も負う。
「そうだな」と煮物を箸で掴めず苦労している父も続けた。
「…はい」
しおらしく返事をして茶碗を流しへ運んだ。
私は、本当に安全な所に暮らしている。特に欲しいものも、いらないものもなく。安穏と。だから絶対これ、といった夢もなく、真剣に物事を考えることもなく、この歳になってしまった。高校の友達はほとんどが大学へ進み、今は仕事に新しい家族との生活に、一生懸命である。私はなんとなく続いてしまっている治との関係を変えるつもりもなく、それ以上に欲しくなる関係もなく、半分中学生のままの気持ちで付き合っている。田舎に埋もれたままの私。それをさらに際立たせたのは、この田舎の、それも昔の思い出になっていたはずの真希ちゃんだった。真希ちゃんが引っ越してしまうまで、真希ちゃんと一緒にいることが楽しくて、私の世界は真希ちゃんなしでは考えられなかった。
中学生の時治と出会って、絵を描く楽しみを知って、本気で絵を描きたいと思った時もあった。けれども、絵描きになりたいとか、具体的にどんな形で絵を描き続けたいのか、未来像は描けなかった。ただ描きたい。そんな気持ちでは、芸術科のある高校や美大など受ける理由にも、自分自身の動機づけにもならなかった。家族や友人達にも、ただの趣味としか認識されていない。
自分の部屋に戻ると、電気を付けるより前に早速鉛筆とスケッチ

ブックを取りだす。満月が近い夜の空は月光でいっぱいになり、淡い光が窓から差し込んでいた。手元がぼんやりと明るく、白いスケッチブックが月光を鋭角に跳ね返す。

私は、何がしたいのだろう。私は、私の人生にまだ何も書きこんでいない。

「綾子〜。油絵の具使うんだったら駐車場にしてね。カーペットにくっついたら取れないんだから。イーゼルもあっちに移動したわよ」

母がリビングから大声で叫んだ。

高校に通っているうちは、何か賞が取れたら美大に行きたいって言おう。卒業してしまってからは、これで絵が描けなくなるわけじゃない。自分のペースで、好きに描き続ければいい。

花、果物、木々達、里山、畑の野菜達、ニュータウンのただ車が移動するためだけの国道。たまには足を延ばして、県外に出るのもいい。けれども私は、大概、家の駐車場に追いやられ、砂埃と冷気に耐えながらシャッター付きの駐車場にこもっていた。絵具のにおいが充満する。パレットの上で絵具がどんどん重なってゆく。目の前の対象物を、顔についた二つの眼球とは別の目で見ようとする。展示会でみた絵具の置き方。筆の動きが見えるような意志を持った色彩の層。キャンバスはいつも何かでいっぱいになった。何かでいっぱいにはなるのだけど、どれも私の胸には留まらず、あっという間に遠くへ逃げていった。その後には、酷く鈍い色をした対象物だけが残った。

「切符は？」

「持った。綾子こそ忘れ物ない？」

治と同じく右手の親指を立ててサインを出した。

上野から新幹線に乗って、新潟まで行く。早朝の時間帯は、自由席でも空きが目立つ。上野駅で新幹線の座席に向かい合って乗ったところで、治が真希ちゃんの話を始めた。

「昨日は、披露宴だったね」

「ああ、真希ちゃんの」

私はこの前の食卓でのことを思い出し、少しうんざりした。まさかこいつも結婚、結婚とか言ってくるんじゃないかって。そしたら殺す。と、思ったところで思考が止まった。治と結婚。二つの言葉が、初めて思考上で一緒になった。結婚の話なんて私たちの間に出たことはない。中学の同級生だって、私たちの関係が未だに続いていると知っている人は少ないから、お二人もそろそろ、なんて冷やかしたりする人もいない。

「女の子ってさ、そう、結婚式とか披露宴とか夢のプランがあったりするの？」
夢のプランという言葉を聞いて、私は声に出して笑ってしまった。治が少し不貞腐れた表情になった。またこれが笑えて吹きだしてしまった。
「なんだよ、綾子が割りとさっぱりな性格なのはわかるけどさ、そういうので女の子、盛り上がったりしないの？」
「夢見すぎ。でも個人によると思うよ。真希ちゃんは、そうだな、たぶん夢見る方」
「へえ。真希ちゃんってさ、小さいころの綾子を一番知っていたんだよな」
「そうだね。治は写真見たぐらいだもんね。仲良かったんだよ。すごく」
それからちょっとだけ、真希ちゃんとの話をした。小学生の時、一緒に作った手作りチョコを好きな男の子に渡そうとしてお互いに玉砕した話。渡せなかったから、交換っこして食べた。毎日のように放課後は空き地で遊び、テレビゲームも、ゲームボーイも、読んだ漫画も私たちのブームはいつも一緒だった。
「いいなぁ、俺も幼馴染がいたけど、引っ越してからそれきりだな。子どもだったから、なんか将来はパイロットになるとか何とか、中二までずっと言い合っていた。綾子は真希ちゃんとはずっと仲良かったんでしょ？」
「う～ん」
私は話すべきか少し悩んだ。正確には、真希ちゃんが引っ越す前に治はうちの中学に来ていた。真希ちゃんの話は、治に何度かした覚えはある。けれども触れちゃいけないことと自分で決めていたから、治に話したことはなかった。
「真希ちゃんは中学ではバドミントン部に入ったんだけど、バド部の先輩にいじめられて結局引っ越すまで学校に来なかったんだ。いきなり全然笑わなくなって、ある日から朝練に迎えに行っても出て来なくなっちゃった」
「ああ。そうなんだ」
「ごめん、なんか暗くして。真希ちゃんは、学校の先生になるのが夢だって言っていたな。でも一時期の不登校以来、人が変わっちゃって、たまに遊んだりはできたけど、昔の真希ちゃんじゃなかった」
当時のことは今思い出してもつらい。真希ちゃん本人が一番つらいのは分かっているけれども、私もつらかったのだ。大親友が笑わない。聞いても話してくれない。私は結局、いじめられていたということを

バド部のクラスメイトから聞いたのだ。真希ちゃんは昔と違う人間になってしまった。私にはそれが受け入れられなくて、前よりももっと遊びに行こうとし、クラスが違っても休み時間は様子を見に行って、休むと家まで行って私の知っている真希ちゃんを見つけ出そうとした。バド部の子達を恨んだ時もあったけど、真希ちゃんが私に何も言ってくれなかった方がショックで、誰も責めることなんてできなかった。

「その頃、綾子にはなんか夢あったの？　その時から絵が描きたかった？」

その頃の、私の夢は……

「う〜ん、どうかな。不明」

「なんだよ、不明って。さては恥ずかしいんじゃな。はは」

「いいじゃん、たぶん中二病まっただ中だったんだから」

真希ちゃんは昔から運動神経が良かったから運動部だろうな。一緒にやりたいけれど、私が入りたい美術部みたいなちょっと湿っぽいのは似合わなかった。自分が運動音痴なのは地域のスポーツ大会で身にしみていたので、真希ちゃんと一緒の部活はあっさり諦めた。残念だけれど。代わりに一緒に登下校して、クラスが違っても休み時間に思いきり遊べばいいんだ。美術部の朝練は強制ではなく、大概朝のホームルームまでをだらだらと美術室で潰すだけだった。しかしそんな日々はあまり長くは続かなかった。一年の途中から真希ちゃんは休みがちになって、一緒にいる時間はどんどん減っていった。

真希ちゃんが学校に殆ど来なくなったころ、治が引っ越してきた。治と出会ったのは美術部だった。私はなんとなく絵が好きで、漫画も好きでいろいろ書いていたし、楽そうだし、で入部を決めた。同じ小学校からの友人も何人かいて、私には過ごしやすい空間だった。治は“デッサン”というものが得意で、本格的な絵を書くことができる人だった。デッサンという言葉さえ知らなかった私は衝撃を受けて、一種のカルチャーショック状態だった。初めて渋谷まで出かけて横断歩道をうまく渡れなかった時のことを思い出した。見るものすべてに圧倒されて、押しつぶされる感覚。治の描いたデッサンはもちろん私を圧倒させた。けれども押しつぶしはしなかった。治の描く鉛筆の軌跡は濃かったり薄かったり、太かったり細かったり、それだけで治の見ているリンゴやワインの入ったバスケットなどが描かれていた。それは先生が教室に貼り付けている絵画の見本よりも暖かくて、そのまま紙の中から取り出せてしまいそうなくらい私の手に馴染みそうだった。治は中学生にして持っている技術を鼻にかけるわけでもなく、人懐っこくて、すぐに部活に溶け込んでいた。私はその時にはもう惚れてい

て、付き合うきっかけになった体育祭まで一年半くらい片思いしていたのだ。

治と出会ってから、私の絵に対する思いは変わった。まず、中途半端な漫画と写実画が混ざったような絵を描くのをやめた。恥ずかしくて漫画は見せられないし、写実画なんかはかっこつけてそうで嫌だから、二つごっちゃなら誰にも何も言われないと思っていた。確かにそうだった。けれども治の書く絵を見て、私は鉛筆画を、それもどこまでも写実的な目の前にあるそのものを描こうと決めた。まずは静物を描くのが基礎だとは教わっていたけれど、私は人物画を書きたかった。それを見ると幸せになれそうな、喜びその物のような、きらきらした絵を描きたかった。まるで真希ちゃんの笑顔みたいな。もしも、私が元気だったころの真希ちゃんの笑顔を描いて、それを真希ちゃんが見たとしたら、その時みたいに笑ってくれるんじゃないかと思っていた。

「私の夢ってね、真希ちゃんを幸せにすることだったんだよ」

電車が走り始めてしばらくしたころ、遠くから、ギリギリ当たらない所に石を投げつけるみたいに、言ってみた。とっくに話題は終わって、揺られ疲れて二人とも外の景色をぼんやりと眺めていた。なんとなく当時の気持ちを話したくなって、それが今しかない気がしたのだ。

私の言葉を聞いた治は、真剣な顔つきだった。つられて私の表情と心も糸が張ったように緊張してしまう。別にそこまで真剣に言ったつもりもなかったんだけれど、場の雰囲気が変わった気がした。

「うん。そうだったんじゃないかって、思ってた」

「え？」

「だって真希ちゃん、真希ちゃんって綾子はずーっと言っているんだよ。この結婚の話がなくたって、中三から今までずっと。気づいてなかった？」

「そんなことない…よ、やめてよ、ほんと昔の友達だし」

窓の方に眼をそらそうとする私を、治は静かに見た。古代ギリシャ風の石像や、食卓に置かれた果物バスケットを観察するように。

そんな風に見ないでよ。と、口に出そうかと思ったけれど、やめた。私は観察される動かないままの静物なのだ。治にはそう見えるんだ。過去の雰囲気をまとったままのサモトラケのニケであるし、年代物ワインの空きビンでもあるんだろう。絵にすれば、本当につまらない。私は生きている人間のくせに固まっている。沈黙に耐えきれず、私は口を開いた。

「真希ちゃんが一緒になる人ってさ、真希ちゃんを本当に幸せにできる人なんだよね。私にはできない。私がどんなにお金持ちで、何でも

真希ちゃんにあげることができても、それって違うんだよ。友達ってだけで、女ってだけで、私には限界があるんだ。どんなに願ったって、幸せをあげられない」

外の景色が流れる。形すら捉えられずに過ぎてゆく柱も、遠くにある山々も、私の走馬灯みたいだ。

真希ちゃんが引っ越す前に笑顔の肖像画を描こうと頑張ったけれども、どれも気に入らなかった。私が下手なのは承知していたけれども、いざ描こうとスケッチブックを広げ、笑った真希ちゃんの写真を持ち出しても、無表情で笑わなくなった真希ちゃんしか思い浮かばなかった。水彩絵具で色入れは一度もされず、描いては破いて丸めて棄てた。そのしわくちゃな紙の中で、真希ちゃんは泣いた。結局、私はお別れの品を間に合わせ程度で買って、遠くなる一家の車を見送っただけだった。

治が見つめたままで言う。

「それって綾子にとって、俺って、真希ちゃんの代わりだったってことだろ？」

違うってすぐに否定したかったけれど、治が続けた。

「俺たち中学から一緒だろ？　十年以上も一緒にいるとさ、やっぱり固まっちゃうんだろうな。水彩絵具と一緒だよ。だからいろいろ固まったままなんだよ」

私は、ああ、関係ってこうやって終わるんだなと諦め始めていた。割とあっさりじゃん、自分も平静だし。こうやって真希ちゃんが去ったみたいに治も行くんだ。なんて簡単なのだろう。過ごした時間はたくさんあるはずなのに。人との出会いは流れでしかない。時々笹舟のような私を立ち止まらせる相手はいるけれども、それも流れの中の一つなのだ。岩に囲まれた流れとは無関係の所にいたつもりが、いつの間にか私ははみ出していたらしい。その代わり私の世界が動きはじめる。当たり前のように歩いていた大地が崩れるのだ。

「そうだね」

私は頷いた。

「だから、水で溶いて濃淡をつけることが大事なんだと思う」

一瞬、治の言ったことが理解できなくて、私は見つめ返してしまう。

「つまりはさ、真希ちゃんの知らせや、今日の旅行がそれ」

そのまま、俺が思うに、と続けた。

「綾子は真希ちゃんを幸せにしたよ。招待状は、昔の恋人たちに送るものなんじゃないかって、俺、今思った。だからさ、……綾子に幸せあげられる人は、俺がいいって思うんだ」

あのさ、と突っ込もうと思ったら声が震えた。

「今ってさ、もっと、考えた言葉言ってよ！　こんな時なんだから」

涙なんか流す準備はしてなかった。止められなかった。私が今泣いた理由を分かっている治がムカつく。そしてどこまでも愛おしい。プロポーズなのかよくわからない言葉に感動しているのではなく、私も真希ちゃんを幸せにした一人になれたんじゃないかってことが、私を救った気がする。

「ひらめきだよ、何でも。いきなりパッて思うんだよ。それに、これは綾子に幸せあげるってことの方だけど、今言わなきゃ、もうずっと言わないような気がしてさぁ。利用してごめん、真希ちゃん」

治は膝の上でグーにしていた私の指を解いて、一緒に握ってくれた。

旅行が終わって三週間したころ、薄緑色の、初夏らしいさわやかな封筒で手紙が届いた。真希ちゃんからだ。中には結婚式と披露宴の写真数枚と、手紙が入っていた。写真は笑顔の真希ちゃんであふれていた。大人になっても、笑った時にぷっくりする頬は変わらない。純白のウエディングドレスが本当に似合っていて、中学の学芸会でお姫様役をやっていたことを思い出した。当時王子役をしていた男子は、二人の愛の誓いの場面になると、いつも顔を真っ赤にしていた。練習場面を観る度に、効果音役の私も王子と同じ気持ちだった。幸せだったのだ。真希ちゃんの旦那さんは優しそうな笑顔で、でもキリリとシャープな顔をした人だった。手紙には、真希ちゃんと別れるまでの特別な思い出がいくつかと、うちの街のニュータウンへ引っ越しを考えていると書いてあった。大人になった真希ちゃんに会える日が、近いかもしれない。私は動きはじめた未来に、期待と不安を感じながら、鉛筆を削った。

〈了〉

注釈：「サモトラケのニケ」
ギリシア神話の勝利の女神ニケの大理石像。一八六三年、エーゲ海北東部のサモトラケ島で発見。ギリシア彫刻の傑作。ルーヴル美術館蔵。
（広辞苑　第六版　岩波書店）

アプとズコ
（Appu & Zukko）　―第三回―

香取　淳

6

お釜を伏せたような山の坂道を、一台のワゴン車が上って行きます。その車は頂上近くの展望台で速度を緩め、駐車場に停まりました。運転席はシートではなく洋ダル型に作られていて、その中には運転手のパーリオがいます。彼は、樽から突き出た半透明の頭を後ろに廻して、アプとズコに声を掛けました。

「さあ着いたぞ、外に出なさい」

アプとズコが開いたドアから外にでると、そこは素晴らしい眺めでした。眼下に陸奥湾の青い海と市街地、ゆったり北に伸びる半島の先には太平洋、その緩やかに湾曲した海岸線の端に尻屋崎が霞んで見えます。

「市街地の向うにレンガ色のビルが何棟か並んでいるだろう。あそこがワシの仕事場、ホサピの増産所だよ」

パーリオが、吸盤に覆われた手で街の一角を指し示しながら言いました。その言葉で足下に目を移すと、入り江に面した平地には、おびただしい数のビルが建ち並んでいます。そこは、宇宙からの侵略者イカタック星人がこの地に築いた首都のイカタック シティです。パーリオが指し示すレンガ色の建物は、市街地の高層ビルが途切れた先に見

えました。それらのすぐ近くに大きな屋根が銀色に光っています。
「レンガ色のビルの近くに銀色の平たい屋根が見えるね。あの建物がこれから行く体育センターだよ」
得意気に案内をするパーリオに、ズコが訊きました。
「あのビルの中で僕らは生まれたのですね。その奥にある細長い建物、増産所を幾重にも取り巻くように延びている建物は？」
「乳児舎だよ。増産所で生まれたホサピはすぐ隣の乳児舎に収容されてミルクが与えられる。一歳位で離乳すると、その奥にある幼児舎に移す。さらに三、四歳になると幼稚舎に移して簡単な躾（しつけ）だ。その後の学童舎については、二人ともよく覚えているだろう」
「そうかー、住む家が毎年変わったのは、そういうことだったのか」
学童舎で学んだ頃を思い出した二人は、納得顔で頷いています。
「それにしても凄い広さ！　ホサピ牧場がこんなに大きいとは」
アプは、果てしなく続く巨大な施設に驚嘆して言いました。それらの校舎に似た建物や広いグランド、プールなどの施設は、遠く尻屋崎の方まで広がっていたのです。
「ホサピ牧場って、最初からこんなに広かったのかな？」
アプが自分に問いかけるような口調で言いました。
「いや、ワシだ。ワシがこのように大きくしたのだ」
パーリオが、キャスター付きの樽から丸い顔を突き出し、筒状の口を膨らませて言いました。
「パーリオ様が、大きくしたのですか？」
アプが、不審気に訊き返します。
「そうさ、ワシがホサピの改良に成功してからだよ。丈夫な体と器用な手先を持ち、しかも主人の指示命令には忠実に従う優秀なホサピをな」
「そのホサピが、イカタック星人の評判になったというわけ？」
「そうさ、ハイパフォーマンスホサピとして世界中から注文が殺到してな。今でも評判は衰えないが、年間に一万頭が限界だな、この牧場では」
パーリオは、眉毛のない目を細めて得意気に答えました。
「それって、どのようにして開発したのですか？」
ズコが、興味津々（しんしん）といった顔つきでパーリオに訊きました。
「それは秘密、企業秘密だから絶対に言えん」
「それはそうですね。でも、増産所の中を一度、見学してみたいな」
ズコが、独り言のように呟きました。

「ああ、それはお安い御用。お前たちのトレーニングが軌道に乗ったらいつでも見せてやろう」
「本当ですか！　見学することができますか？」
「もちろんだ。ワシはいま、増産所の理事長だよ。あのレンガ色のビルにいる者はな、誰だってワシの言うことに従う」
「パーリオ様が、一番偉い訳ですね。だったら何時でも見学することができますね。楽しみだなー」
「おいおい、ズコ、目的を忘れては困る。お前たちをここに連れてきたのは冬季のトレーニングのためだ。しっかり足腰を鍛えて、来シーズンに備えないといかんぞ」
「分かっていますよ、パーリオ様。僕らはきっちりトレーニングを積んで、いつでも勝てる体を作りますから」
そう言いながら、ズコは膝の屈伸運動を始めました。
「ズコ、こんなところで運動をすることはない。これから山を下りて、体育センターに行くからな」
そういうと、パーリオはキャスター付きの樽を移動させて、ワゴン車の運転台に向かいます。アプとズコも開いた後部ドアから乗り込んで、一行は急な坂道を下って行きました。

体育センターに着くと、パーリオはワゴン車を玄関前で停めました。そして、アプとズコに声を掛けます。
「ワシは此処にいるが、中を覗いてみるか？」
「ハイ、長いこと来ていないので！」
アプとズコはそう答えると、空いたドアから外に飛び出しました。もちろん、二人は紫のコスチュームで身を固めていますから、体育センターにはフリーで入れます。
係員からはフリーでも、個々のホサピを確認するチェックは必ず受けます。入口に並んだ狭いゲートを潜り抜けるとき、顔の静脈をセンサーが読み取ります。そして、瞬時に『増産所理事長のパーリオが所有するレース用ホサピのアプ』と認証されて、ゲートの扉が開くのです。ズコも同じようにチェックを受けて館内に入りました。
広い体育センターには、ローティーンのホサピが沢山いました。二人は、三階にある観覧席に昇ります。そこからは広大なセンターの様子を一望することができるのです。四角形に近いトラックを走るもの、相撲とレスリングをミックスしたような格闘技に興じるもの、体操のような器具を使って体を鍛えるものなど、区画ごとに様々なスポーツが繰り広げられていました。ただ、幼いホサピたちの職業はまだ決まっていないので、コスチュームは全員が白です。それらの白に交

じって、緑色のコスチュームに身を固めた大人のホサピがかなりいました。緑のコスチュームは教師役で、こどもホサピの体育を指導しているのです。アプとズコも学童舎で過ごした頃には、多くの教師役ホサピから躾や教育を受けてきました。

「相変わらず、スポーツは盛んだなあ」

ズコが独り言のように言いました。

「そうね、まったく変わらない光景だわ」

アプも懐かしい面持ちで、ズコに相槌を打ちます。

「こども達がこんなに多かったら、僕たちは邪魔になるかも……」

「そうだわね、私たちが走るのはこの子たちが帰った後、ということになりそうだわね」

しばらくセンター内を見渡していた二人は、席を立って入口に戻ってきました。玄関では、パーリオがワゴン車のハザードランプを点滅させて待っています。

「お待たせしました、パーリオ様。センターの中は変わってはいませんが、懐かしさの余りつい長居を……。済みません」

「分かっていればそれでいい。ところで、お前たちをこれからセンター長に引き合わせる。センター長の前では気をつけるように」

「ハイ、気をつけます。でも、具体的にはどのように？」

ズコが、困惑顔で訊きました。

「いつも言っているだろう！　普通のホサピのように振る舞うことだよ。余計なことは言わない、訊かない、考えない！」

「ハイ、そうでした」

「ただ、訊かれたことだけに答え、命じられたことだけを行うこと」

「ハイ、分かりました」

「私が開発した優秀なホサピは、自ら考えることはしない、反発や反抗もしない。いつもおとなしくて、主人の指示命令に忠実に従う、ということになっている。お前たちもそのようなホサピの筈だがな」

「ハイ、そり通りです。パーリオ様」

アプとズコは忘れかけていた約束事を確認するかのように、声を合わせて答えました。

「よし、それでは出発進行！」

大声を発したパーリオは、樽の上から伸ばした二本の手だけでワゴン車を発進させました。殆ど自動で動く車は、ゆっくり市街地に入って行きます。二、三分走った先に体育センターの事務所を示す看板が見えてきました。その脇にある駐車場に車を停めたパーリオが言います。

「これからセンター長に会ってくるから、車の中で待っておれ」

「はい、パーリオ様」
パーリオは、用心深くドアのすべてをロックして、車内からは開けられないようにしました。そしてキャスター付きの樽に籠って、事務所の中に入って行きます。
数分でパーリオが事務所から出てきました。彼の後には二人のイカタック星人が、やはりキャスター付きの樽に籠った格好でついてきました。一行がワゴン車のすぐ近くまで来たとき、パーリオが後部ドアを開けて大声で命令しました。
「アプ号とズコ号、外に出ろ！」
「ハイ、パーリオ様」
アプとズコは、身を固くしてイカタック星人たちの前に立ちました。真ん中の金色の樽に入ったセンター長が声をかけました。
「雌（めす）の方がアプ号で、雄（おす）の方がズコ号だな。フーム、なかなか良い体型をしているではないか」
「さすがにセンター長はお目が高い。これ、アプ号とズコ号、お二人にご挨拶をしなさい」
パーリオに指示されて、アプが先に名前を告げ、次いでズコが名前を言いました。
「ウム、分かった。来年の春まで、しっかりトレーニングをするといい。お前たちの面倒は、今日から私の秘書がみることになる」
センター長は、そう言って隣の女性を紹介しました。
「秘書のペリーゼです。パーリオ理事長に代わって、これから私がお前たちの世話をするから、何でも相談しなさい」
「ハイ、分かりました、ペッ、ペッ、ペリ……」
「ペリーゼです！　一度で覚えなさい」
「ハイ、ペリーゼ様」
アプとズコは、呑み込みの悪い普通のホサピのように振る舞いながら、新しい主人に挨拶をしました。
「それではペリーゼさん、手数を掛けるがよろしく頼むよ。ワシの大切なレース用ホサピだから、怪我だけはさせないようにな」
「はい、理事長。ホサピの扱いには慣れていますから、ご安心ください」
その言葉を聞くと、パーリオはアプとズコをそこに残して、ワゴン車に乗ろうとしました。
「あれッ、パーリオ様はどちらに？」
「仕事だよ。増産所の仕事が山積しているからな」
不安げに訊くアプとズコに、パーリオが答えました。

「ワシも時々体育センターに顔を出すようにするから、しっかりトレーニングをすること。分かったな」
そう言い残して、パーリオは立ち去って行きました。センター長もパーリオの車を見送ると、事務所の方に戻って行きます。
「コラッ、生意気なホサピ、このトラックに乗れ！」
今まで聞いたこともないヒステリックな声です。その怒声に震えながらアプとズコは小型トラックの荷台に飛び乗りました。
「二頭とも憎たらしい顔つきをして！　本来なら一発殴るところだけど、理事長のホサピだからこらえているのよ！」
秘書のペリーゼは、余計な仕事を命じられたことが気に入りません。その鬱憤（うっぷん）を思い切りアプとズコにぶつけてきたのです。
乱暴に発進した小型トラックは、体育センターの方に戻る道を走ります。ペリーゼが無闇にブレーキを踏んだり急ハンドルを切ったりするので、アプとズコは小型トラックの運転台の後ろに必死でしがみついていました。それでもトラックはすぐに体育センターの脇にある宿舎に到着しました。
「生意気ホサピ、私の後についてきな！」
ペリーゼは薄ピンク色の樽に籠り、宿舎の玄関に入りました。受付で、パーリオ所有のレース用ホサピであることを申告して、顔の静脈認証でチェックを受けます。それが済むと、世話係のホサピが呼びつけられました。黄色いコスチュームのハウスキーパーホサピで、名はチロロと言うことです。
「ここにいるチロロが、お前たちの世話係。それから、体育センターは学童舎のホサピが引きあげた後にだけ使える。午後の三時か四時頃からだと思うけど、詳しいことはセンターの受付で聞くこと。分かった？」
「ハイ、ペリーゼ様」
「大抵のことは、係のチロロに仕込んであるから…。でも何か困ったときには、私に連絡しなさい」
そう言い残して、ペリーゼは宿舎の玄関から出て行きます。アプとズコはチロロという中年の婦人ホサピに案内されて、冬のあいだ寝起きする部屋に向かいました。
「チロロさん、僕はズコと言います。これからお世話になりますが、よろしくお願いします」
廊下を歩きながら、ズコが挨拶をしました。しかし、チロロというハウスキーパーのホサピは無表情で何も答えません。何度か「僕はズコ。チロロさん、聞こえますか？」と声を掛けてもチロロは無言です。

そのズコの脇腹を、アプが突いて、「シー」と唇に人差し指を当てています。そうです、ホサピにはコスチュームが示す役割があって、毎日の行動はパターン化されているのです。ですから、ホサピ同士の会話はほとんど必要がなく、多くのホサピたちは話す言葉を失っていたのです。

体育センターでのトレーニングの日々が始まりました。とはいっても、学童舎のホサピたちが立ち去るのは大抵午後の三時過ぎ、それからの二、三時間がアプとズコに与えられたトレーニングの時間です。

それ以外の時間帯は、紫色のコスチュームに身を固めて、観覧席からホサピたちの運動を眺めているほかはありません。

一週間ほど経ったある日、パーリオが体育センターに顔を出しました。

「なんだ、お前たち。観覧席で頬杖をついて見学か」

「ハイ、パーリオ様。学童舎のホサピたちが優先なので、三時過ぎまではトレーニングができません」

「それは困ったものだ、ワシが手を打って何とかしよう」

「いえ、パーリオ様、無理はお止めください。私たちに対する周囲の風当たりが強くなりますから。此処では、この紫色のコスチュームが目立ち過ぎるみたいです」

アプとズコは、自分たちの着ているジャージを指さして訴えます。

「フーム、そんなことがあるのかねえ。だけどトレーニングができなければ、ここにいる意味がなくなってしまうぞ」

「いいえ、時間は短くても密度の高い練習をしていますから。それに、筋トレはトラックに出なくてもできます」

「そうか、それではしばらく様子を見ることにしよう」

そう言うと、パーリオはキャスター付きの樽を回転させて、帰ろうとしました。

「あの、パーリオ様、お願いがあります。ここに来たとき、いつか増産所を見学させてくれると……」

「ああ、約束したことがあるな」

ズコの問いかけに、パーリオが答えました。

「そうか、時間を持て余しているなら、これから行ってみるか」

「ハイ、お願いします！」

アプとズコが声を揃えて答えます。パーリオは、玄関先に停めていたワゴン車に二人を乗せて、後部ドアを閉めます。そして、発進しようとしましたが、ハンドルに掛けた手が止まりました。

「待てよ！　お前たちはさっき、紫色の服装が目立ち過ぎると言った

な。増産所の中を見学するときも、同じことが言えるかな？」
「ハイ、多分そうなるかと……」
「分かった。まず、お前たちの宿舎に寄ってからだ」
パーリオは、ワゴン車をすぐ近くの宿舎に横付けしました。そして、受付で何かを手に入れて戻ってきました。
「これで準備は万端整った。先ずワシの部屋に行くからな」
そう言って、パーリオは増産所に向かって車を発進させます。数分で増産所の中央にある管理棟につきました。パーリオは、専用の駐車場にワゴン車を停めて、理事長に直接つながっているドアを開けます。
「さあ、アプとズコ、ここが理事長室だ。さすがのワシでも、お前たちを部屋の中には入れんが、廊下でこの服に着替えなさい」
パーリオは、先ほど宿舎で手に入れた紙袋を手渡します。アプとズコが中を覗くと、それは黄色のハウスキーパー用の衣服でした。
「パーリオ様、有難うございます。早速着替えます」
「そうすればお前たちはまったく目立たなくなる。増産所の中にはハウスキーパーの実習生が一杯いるからな」
パーリオは、自らの思いつきに満足して、上機嫌の表情です。
「それではまず、ワシが長く働いてきた研究所を見せよう」
二人が着替えを済ませると、パーリオはキャスター付きの樽に籠り、研究所の玄関に入りました。そのすぐ後ろをアプとズコがついて行きます。広い廊下が真っすぐに伸び、右手にガラス窓のある研究室が並んでいます。大きな窓から、研究室の内部が良く見えました。灰色の樽に籠った研究者が試験管を片手に持ち、スポイトに似た形をしたピペットで試薬を注入しています。その傍らでは、顕微鏡を覗いている者もいます。
「この部屋では何をしているのですか？」
「ああ、この部屋ではホサピの精子の改良を研究している。ワシがほぼ完璧なものを作ったが、ニーズは常に変化するからな。いろいろなホサピが作れるように、常に研究を続けているわけだ」
「フーン、精子の改良ですか。いままでに作られてきたホサピたちも同じような方法で？」
ズコが感心した顔つきで、パーリオに訊きます。
「そうだ、精子に含まれる遺伝子を操作するやり方は効率が良いし、大量生産が可能になる」
「凄いですね、パーリオ様。でも遺伝子の操作って、むずかしいでしょう？」
アプが質問を続けます。
「それは、それはむずかしい。操作を強くやり過ぎたら生命力が乏し

くなって育たないし、逆に弱過ぎると主人の言うことを聞かなくなる。間違って凶暴性を持つホサピなどができたら、生かしてはおけないし……」

パーリオは、大きな窓の前に樽を停めて、研究室の中を眺めながら感慨深げに話します。その脇を、小さなクーラーボックスを抱えたホサピが通り掛かりました。着ている服は、アプとズコと同じ黄色です。

「ここでもハウスキーパーのホサピが働いていますね」

「そう、ワシが開発したホサピは優秀だから、むずかしい仕事だって、言いつけ通りにやれるのだ」

誇らしげにそう言うと、パーリオはキャスター付きの樽をさらに進めて、研究所の先にある建物の中に入って行きます。廊下を行き来するホサピのコスチュームが赤に変わりました。

「アレ、ここのホサピは赤い服、ということはナースですね」

アプが驚いて訊きました。

「そう、この建物は授産所だ。女のホサピは皆、二十歳になるとここに集められ、人工授精を受けることになっている」

「へーッ、何人、いえ何頭くらいのホサピが？」

「一日三十頭前後で、月に九百頭。年間では一万頭を超えるペースで生産されている」

パーリオがビジネスライクに答えました。授産所は狭い建物でしたが、そこを出た向かいには大きな棟が続いています。

「この大きな建物が妊婦棟だ。受胎したホサピは出産まで、ここで過ごすことになる」

「随分、システマチックに出来ているのですね。そういうことであれば、出産する場所も近くに？」

「その通りだよ、ズコ。授産所の隣に見える建物が周産期棟と言う訳さ」

パーリオはそう答えながら、少し離れた棟に移動して行きます。建物の壁がレンガ色から灰色に変わりました。その校舎のような建物に入ると、廊下を挟んだ左右の部屋にベビーベッドが連なっています。

そして、ベッドのあちらこちらに黄色の服装をしたホサピが赤子のホサピに哺乳瓶でミルクを与えたり、おむつを取り換えたりしていました。

「凄い！　赤ちゃんの数もだけど、世話をしているホサピの数も」

アプが、小声で叫びました。

「そう、この乳児棟と次の幼児棟では人手がかかる。だから、専任のハウスキーパー用ホサピのほかに十四、五歳のホサピが実習生として動員されている。それに、先ほどの妊婦棟にいるホサピも、動け

るときにはここで育児をすることになっているのだ」
「へーッ、育児にはホサピが総がかりで、というわけですね……」
「そうだ。我々の仲間は地球の重力に弱いから、力仕事はほとんどホサピにやらせているのだ」
パーリオは、自信に満ちた声で誇らしげに言いました。そして、キャスター付きの樽をくるりと反転させて、入口に戻って行きます。
「パーリオ様が作ったホサピは、本当に優秀なんですね」
ズコが、パーリオの後から呟くように言いました。
「その通り。我々が何もしなくても、物事はうまく進むのさ」
パーリオは、上機嫌で増産所の中を戻って行きます。そして、理事長室に直結した駐車場まで来ると、ワゴン車に二人を乗せて、体育センターに送り届けました。

次の週の午後、パーリオが再び体育センターにやってきました。アプとズコは、相変わらず紫色のコスチュームで観覧席にいました。
「また、お前たちは授業参観かね」
「あ、パーリオ様。先週は増産所の見学を、有難うございました」
「そんなことはどうでもいいが、毎日のトレーニングはしっかりできているのかな？」
「ハイ、一応は…。でも、毎日が退屈で、退屈で……」
ズコが項垂(うなだ)れて答えます。
「頑張ろうという気持ちはあるんだけど、一日の大半がこのありさまでは、遣り甲斐がないし、空しくなっちゃうのよね」
アプもズコに相槌を打ちながら言います。
「そうか、考えてみればお前たち二人がホモサピエンス（人間）であるということは大変なことだなあ。考える力があれば悩みも生まれてくる訳だ。その点、ホサピには悩みが無くていいぞ」
「パーリオ様、そんなことを言っていないで、お願いします」
「いまさら何を言うか、お前たち。このあいだワシが何とかしようと提案したとき、止めたのはどこの誰だったかな？」
「そんな意地悪を言わないで、何とかしてください」
「一体、ワシに何をして欲しいというのだ？」
「先週の見学のとき、乳児舎や幼児舎ではすごく人手がかかると言われましたね。だったら、僕らをハウスキーパーとして使ってくださいよ」
「なるほど、先週のように黄色い服を着ていれば、目立たないか」
「そうです。それで午後の三時に、紫のコスチュームに着替えて、

こに来られるようにしてくだされば……」
アプとズコが祈るような表情で、パーリオに訴えます。
「人手不足がひどいから、きっと乳児舎や幼児舎では大歓迎をするだろうなあ。一度現場の責任者に頼んでみるか」
「お願いします。そうなれば私たちの生活にも張り合いが出て、トレーニングにも力が入りますから」
アプとズコの要望に大きく頷き、パーリオは体育センターを後にしました。それから数日後に、二人の願いは叶うことになります。
「現場の責任者から、許可を取ったぞ」
体育センターにやってきたパーリオが、二人に声を掛けます。
「本当ですか、パーリオ様」
「明日からはまず、理事長室の駐車場まで紫のコスチュームで走ること。そこの廊下に、この間の黄色い服を置いておくから、必ず着替えをして増産所の中に入るように」
「私たち二人だけで入れますか？」
「ああ、受付にお前たちのことをよく話してあるから、大丈夫だ」
「中に入った後は、どうなりますか？」
「増産所の中と乳児舎、それに幼児舎の中はフリーパスにしてある。まあ、お前たちの気分転換が主目的だから、好きなように手伝いをしたらいいさ」
「有難うございます。パーリオ様」
「午後の三時になったら理事長室に戻って、紫の服に着替えること。そこから体育センターまでは走っての移動だ。少し寒いが我慢しなさい」
「平気ですよ。大した距離ではありませんから」
そのような経緯を経て、アプとズコにはホサピの増産所や育児施設に出入りすることが許されるようになったのです。二人は、パーリオの言いつけ通りに、毎朝増殖所で受け付けを済ませ、最初は忙しい乳児舎で多くの時間を過ごしました。そして、どのようなホサピが、どんな具合に働いているのか、イカタック星人の監督は日に何度くらい見回りに来るのか……などを細かく観察してゆきます。
内部の事情が呑み込めてきた二人は、次第に行動範囲を広げていきました。幼児者では、託児所に似たやり方で幼いホサピの世話をしながら、ホサピとしての躾が施されていきます。増産所の妊婦棟には、白い衣服のホサピが大勢います。その中には、乳児舎で顔見知りになったホサピの顔も数多く見掛けました。
二人が一番驚いたのは、研究所の左側にある施設の中を見たときです。その朝は、たまたまパーリオと一緒になったので、増産所に連れ

だって入ることになったのです。大きな窓がある研究所と授産所の反対側に、塀の高い施設がありました。その施設は、刑務所によく似たたたずまいをしています。その塀の中から時折、大きな声が聞こえてくるのです。

「ここはいったい何の施設ですか？」

ズコがパーリオに尋ねました。

「ここはまだお前たちに説明したことがなかったな。今日はいい機会だから、中を見せてやろう」

「お願いします、パーリオ様」

「よし、ワシの後からついて来なさい」

そういって、パーリオはエレベーターの前に樽を進めます。扉が開くと、アプとズコを先に乗せ、パーリオが三階のボタンを押します。エレベーターから降りると、パーリオは塀の中を見渡せるバルコニーに出ました。そこには校舎に似た建物と大きなグランドがあって、大勢の男のホサピが掛けっこをしたり、相撲のような格闘技をしたりしていました。隅にあるプールで泳いでいるホサピも見えます。

「ここはな、種ホサピの飼育所だよ」

パーリオが、吸盤だらけの両手を左右に広げて言いました。

「ワーッ、いろいろなホサピが！」

アプとズコは驚嘆して目の前のホサピたちを見渡しました。体がすごく大きいものがいれば、小さなものもいます。肌の色も白や黄色、黒いものがいて、髪の色もさまざまです。

「なぜ、こんなに違うホサピがいるのですか？」

ズコがパーリオに尋ねました。

「力仕事には、大きいホサピが向いている。狭いところでは小さい方が使いやすい。ペット用には、さまざまなホサピの注文がくる」

「それで、いろいろなタイプを集めている訳ですか」

「そうだ。この増産所は、あらゆる市場ニーズに応えられるのが売りでね」

パーリオは、誇らしげにそう言い切りました。それを聞いて、アプとズコはひどく惨（みじ）めで、悲しい気分に陥ってしまいました。

7

四月に入っても北国は寒くて、谷川が一筋流れている山はまだ冬枯れの樹木に覆われていました。日当たりの悪い窪地のところどころには、雪や氷も残っています。清流の畔も灰色の灌木が茂っていますが、

それらに混じって黄色い花が数本の若い枝に連なっていました。
「あ、万作の花だ！」
アプが大声をあげました。早春に『先ず咲く』と云うことから、その名が付けられたという万作の花が、黄色に輝いていました。よく見ると、万作の周りにはネコヤナギも茂っていて、細い枝先に銀色の花穂が柔らかく開き始めていました。
「遠目には分かりにくいけど、春が確実に来ているんだね」
ズコも、踝まで水に浸かった足を止めて、茂みを覗き込みます。
「さあ、早く源蔵爺さんと千佳婆さんのところに行こう！」
アプが急くようにそう言って、二人は上流に向かいます。谷川の水はとても冷たくて、ランニングで温まっていた足も冷えてきました。小さな滝を乗り越えて、地底湖のある洞窟の前まで来ました。洞窟から流れ出る細い流れに足を踏み入れると、水温は谷川より少し暖かく感じられます。
二人が身を屈めて洞窟の中に入ると、薄暗い闇に懐かしい源蔵爺さんの声が響き渡りました。
「アプとズコ、久しぶり！　元気で戻ってきたな」
「ハイ、源蔵爺さんも千佳婆さんもお元気ですか」
アプとズコは、闇に向かって大声で叫びました。
「あー、元気だ。君たちに会える日を楽しみにしていたよ。いま、ボートを出すからな」
数分で、舳先にライトをつけたボートが近付いてきました。運転席には源蔵爺さんが座って、ボートを操縦していました。
「二人ともよく戻ってきた。おッ、アプもズコも背丈が伸びたな」
源蔵爺さんは、岩の桟橋に横付けしたボートに乗り込む二人を見て言います。
「そうですか、自分たちには分かりませんが……」
「育ち盛りだから、伸びるのも早い」
源蔵爺さんは、そう呟きながらボートを発進させます。そして、対岸に着くと、千佳婆さんのいる部屋に急ぎました。
「千佳婆さん、こんにちは！　いま戻りました」
「アプとズコね、元気でよかった。また会えて嬉しいわ」
そう言いながら千佳婆さんは立ち上がり、アプとズコに近づきます。少し危うい歩みですが、杖なしに立っています。その彼女の両手をアプとズコが片方ずつ握って言いました。
「千佳婆さん、無理はしないで。そこに座っていて」
「いいえ、自分の足で歩けることは幸せよ。いま、飲み物を用意しますね」

彼女は、握られた手を振りほどいて、奥にある台所に向かいました。そして、お盆にジュースが入ったグラスを載せて戻ってきました。

「君たちが、ここに来るのは何か月ぶりかな？」

源蔵爺さんが、テーブルの椅子に掛けてジュースを飲む二人に訊きます。

「十二月から三月までだから、丸四ヶ月です」

「そうか、その間はずっとホサピ牧場にいたのかな？」

「ハイ、主人のペクール様に連れられて、最初は体育センターのすぐ脇にある宿舎に入りました」

源蔵爺さんの質問に、アプとズコはすらすらと答えます。

「そこから先が肝心だが、うまくいったかな？」

「ハイ、体育センターが学童舎のホサピの授業のために、夕方しか使えなかったから、実際に退屈で、退屈で……」

「そうか、ごく自然に施設の中に？」

「ハイ、源蔵爺さんの言う通りにやってみたら、信じられないほどスムーズに入れました」

アプとズコは昨秋の最後に、ここで源蔵爺さんから授かった秘策をホサピ牧場で忠実に果たしたのです。その詳しい経緯を、二人は順序立てて話し始めました。研究室の中の様子やそれに隣接した授産所、周産期棟などです。

「かなり詳しく見てきたね。それでは私が紙を用意するから、増産所の見取り図を作り上げよう」

源蔵爺さんの提案で、テーブルに模造紙が広げられます。その上に、青色のフェルトペンで研究所や授産所の位置を書き込んでいきます。授産所の隣が周産期棟です。

「ところで、周産期って、どういう意味ですか？」

ズコが、源蔵爺さんに尋ねます。

「それは、お産の周（まわ）りと言うこと、つまりお産の前と後の時期を指して使う言葉だよ」

「あ、そうか。妊婦のホサピは、この建物の中でお産をする訳だ」

「そう、ここで生まれた赤ん坊は乳児用の施設に移される筈だが、それは何処にあるのかな？」

「ああ、乳児舎ですね。それはレンガ色の建物から少し離れたこの位置、細長い建物ですね」

アプとズコに源蔵爺さんも加わって、ホサピの増産所と育児施設の見取り図が出来上がってゆきます。妊婦棟や種ホサピが収容された刑務所のような建物も書き込まれました。

「ウーム、全体像が見えてきたな。この建物は何だろう？」
源蔵爺さんが、周産期棟に隣接した建物を指して訊きます。
「そこは何だろう、アプは分かる？」
「ううん、分からない。ただ、赤いコスチュームのホサピが出入りしていたから、多分病院とか、診療所みたいなものかも知れないわ」
「いや、診療所なら乳児舎や幼児舎の真ん中にあったじゃないか。赤ん坊や幼児はしょっちゅう熱を出すから」
「そうね、言われてみれば確かに……」
アプが小首を傾げます。二人のやり取りを聞いていた源蔵爺さんが、話をうまく取りまとめました。
「つまり、この建物が何かは不明という訳だ。だから、ここにはクエッションマークを付けておこう」
テーブルの脇で様子を見ていた千佳婆さんが、声を掛けました。
「アプとズコ、もう時間ですよ。明るいうちに帰らないと」
「えッ、本当だ。時間が経つのは早いものですね」
二人は慌てて帰り支度を始めます。
「続きは次にして、今日はここまでにしよう」
源蔵爺さんも立ち上がり、三人は地底湖の桟橋に係留していたボートに乗り込みました。

アプとズコは、週に三日か四日のペースで、地底湖のある洞窟を訪れていました。熱心な三人の討議で、増産所の大まかな見取り図も完成しています。さらに詳しい調査が必要な建物や事がらも箇条書きに纏められて、次に増産所に行く機会があったら調べることになっていました。
「ところでアプとズコ、君たちはどうしたら赤ちゃんができるのか、知っているかい？」
ある日、源蔵爺さんが二人に尋ねました。
「いえ、分かりません」
二人が、神妙な面持ちで答えます。
「そうだろうな。しかし、ホサピの増産所で何が行われているのかを正確に知るためには、性の知識が欠かせない。これからスクールで勉強しよう」
「ハイ、お願いします」
源蔵爺さんは、二人をスクールに連れて行き、保健体育の教材の中から『性について』を選びます。そして、大きなディスプレイに画像を映し出しました。最初は男女の性器の形と機能で、卵巣では卵子が、精巣では精子が作られる。次いで排卵と受精の仕組み、さらに受精卵

の着床…という具合に順を追って分かりやすい解説が繰り広げられます。一時間半ほどで、学習プログラムが終了しました。
「よく分かったかな？　二人とも」
源蔵爺さんが何時ものように理解を深める質問を始めます。
「おしべとめしべがくっつくと、実や種ができるのと同じことと考えていいのかしら？」
アプが素朴な質問をしました。
「そう、植物のところで学習したおしべが男性の性器、めしべが女性の性器に相当するわけだ」
源蔵爺さんが、穏やかな表情で答えます。
「植物と人間とでは形は違うが、おしべからは花粉が、男性性器からは精液が出て、その中に遺伝子が含まれている点では同じだね」
源蔵爺さんは、さらに補足して言いました。その言葉に、ズコが反応して大声をあげました。
「そうかー、増産所では種ホサピから精液を採って、その精液に含まれる遺伝子を操作してから、授産所で若い女ホサピの性器の中に注入している、そうでしょう！」
「多分、ズコの言う通りだと思うな」
源蔵爺さんもズコに同意して、大きく頷きます。
「そうすると増殖所の中で精液がどのように運ばれているか、その経路を調べることが大切になるわね」
アプも腕組みをしながら呟きました。
「よし、今日はここまで」
源蔵爺さんの掛け声で、アプとズコは終了の挨拶をして地底湖のある洞窟を後にしました。

ある夏の日の夕暮時のことです。一日のトレーニングを終えて、というのは建前で、実際には地底湖のある洞窟を出て、アプとズコは街の入口まで戻ってきました。そこには広い公園があって、園内には大きな池がありました。その池は、火災に備えた貯水場を兼ねていたので、かなり深かったのです。その池に誤って落ちたのでしょうか、黄色いコスチュームのホサピが浮いていました。
「アッ、誰か溺れている！」
ズコはそう叫ぶと、紫色のシャツとパンツを脱ぎ捨て、池に飛び込みました。そして、数メートル先のホサピのところまで全力で泳ぎます。仰向けに浮いているのは若い女のホサピでしたが、意識はありません。ズコは黄色い衣服の袖を掴んで、池の畔まで苦心して運びます。岸に立っているアプと力を合わせ、二人は意識のないホサピを引上げ

ました。
　ズコはすかさず若いホサピの耳元で「大丈夫ですか」と何度も叫びます。しかし、応答はありません。叫びながら胸元を観察しましたが、呼吸もしていないようです。すかさずズコは、若いホサピの顎を右手の指で軽く持ち上げ、左手で鼻を塞ぎます。そして、彼女の口の中に大きく息を吹き込みました。それを二回繰り返すと、今度は若い女ホサピの胸に両手を重ねて強く押します。一、二、三、四と速いテンポで三十まで数えると、今度は人工呼吸を二回繰り返します。
　突然、ズコの首に何かが絡みつきました。それは、吸盤で覆われた蛇のように感じられます。ズコは、「苦しい！」と叫びながら、振り解こうとしましたが、締め付けは強まるばかりです。
「この強姦ホサピ！　お前も池に放り込んでやる！」
　突然の攻撃でズコは上向きにひっくり返されてしまいました。それはゆでダコのように真っ赤な顔のイカタック星人で、下着一枚のズコを強姦と間違えたのでした。
　ズコは猛烈に腹が立ちました。樽から突き出した赤い顔を、思い切り殴り返したい衝動に駆られましたが、必死で耐えます。もし、反撃をしたときには、ズコは普通のホサピではないことがばれてしまうからです。
「けしからんホサピだ、まだ去勢が済んでいないな」
　そう言うと、イカタック星人は抵抗しないで耐えているズコの下着のパンツも捲(めく)り取ります。
「やっぱり、やけどの痕跡も何もない。もう陰毛も生えかけているというのに、まったくけしからん」
　イカタック星人は、ズコの股間を調べてそう言いました。
「済みません、これは強姦なんかじゃありません！」
　紫色のコスチュームのアプが駆けつけてきて叫びます。彼女は、風に飛ばされたズコのシャツとパンツを拾いにその場を離れていたのです。
「何だ、お前たちはエンタテイメントのホサピか？」
「ハイ、パーリオ様のレース用ホサピです」
　アプの言葉でイカタック星人の興奮は少しだけ納まってきました。レース用ホサピは高価なものでしたから、もし傷をつけたときの賠償金が大変な金額になることがあったからです。
「お願いですから、早くズコに、この男の子のホサピに服を着させてください」
　アプの願いが聞き入れられて、ズコは下着をつけ、紫のパンツと

シャツを身につけました。それを見ながら、イカタック星人が言いました。

「最近ハウスキーパー用に買ったホサピだが、まったく無能で役立たずだ。腹が立って池に放り込んだら余計なことをしやがって！　盛りがついたホサピは早く去勢するように、これから飼い主に掛け合ってやる」

そう言って、イカタック星人はパーリオの家に行くと言ってきません。ホサピはイカタック星人に抵抗することは一切ありません。ですから、二人は自分たちの住み家にそのイカタック星人を案内するほかはないわけです。しかし、ズコは気を失ったホサピも気がかりでした。足元に横たわる女ホサピは意識を取り戻したとみえ、胸がわずかに上下し始めました。手足も少し動いたようです。その様子を屈み込んで確認しようとしたとき、再び蛇のような手が伸びてきました。

「この色気違いホサピ！　もう許さんぞ」

イカタック星人の吸盤に覆われた手が首に巻きつきます。アプもズコの片手を強く引っ張ります。その力で、ズコは後方に二歩、三歩と引き離されました。アプはズコを引き離しながら、彼の脇腹を強く小突きます。そして、ズコの目を見つめて、抵抗をやめるように目配せをしました。

街中の道を一キロメートルほど歩いて、パーリオの屋敷の前に来ました。アプが呼び鈴を押して、パーリオを呼びます。

「これはまた、何ごとでしょう？」

見慣れない客を屋敷の中に招き入れたパーリオが口を開きました。

「このホサピがな、まったく怪しからんことをやりおった！」

怒りの収まらないイカタック星人が大声で怒鳴ります。

「はあ、これはズコというレース用のホサピですが、いったい何を？」

「レース用だか、何だか知らんけどな。こいつはワシのホサピを強姦しようとしたんじゃ。許せん！」

「まあ、そんなに興奮しないで、何があったのか冷静に話して下さい」

パーリオは、顔を紅潮させた男を諌めながら尋ねます。

「最近ハウスキーパー用に購入したメスのホサピがな、あまりにも役立たずで失敗ばかり繰り返すから、躾のために公園の池に放り込んだ。頃合いを見て引きあげようと思ったら、この盛りのついたホサピが勝手に引きあげて、キスをしたり乳房をまさぐったりの強姦だ」

「そんなバカな、何かの間違いでしょう」

「いや、間違いなんかじゃない。それが証拠に、ここにいるメスのホ

サピが紫の服を拾ってきて、着せた後もまた抱きつこうとした」
興奮した男の言葉に、パーリオはアプに訊きます。
「アプ、この人の言うことは本当か？」
「はあ、そんな風に見えないことも……」
「ほーれ、仲間のホサピも認めているではないか」
アプは、失神していた女ホサピが意識を取り戻した様子なので、確かめようとしたのだと言いかけましたが、その言葉を喉の奥で懸命に噛み殺していました。
「こんな助平ホサピはすぐに去勢しろ！　大体オスのホサピは、十二歳になる前に去勢することがルールだろう」
「どうやら私のホサピが申し訳ないことをしたようで、済みません。しかし、これはレース用なので去勢だけは勘弁願いたい」
状況が呑み込めたパーリオは、下手に出て誤ります。
「レース用だなんて、身勝手なことを言うな！　去勢しないというなら檻に入れるかロープで繋いでおくか、きちんとした飼育をするべきではないのかね、エッ」
「ごもっともです。今後は飼い主として責任をしっかり果たしますから、今日のところはお引き取り願えませんか」
「クソッ、本来なら市役所の屠殺係に引き渡すところだが……」
そう捨て台詞を残して、男はパーリオの屋敷から去って行きました。
屋敷の扉を閉めたパーリオは、アプとズコをホサピ舎の前に直立させて厳しい口調で訊きます。
「ズコ、こんなことを何故やったのだ！」
詰問されてもズコは答えることができません。心臓マッサージや人工呼吸は地底湖のある洞窟で学んだことですが、それはパーリオには秘密のことです。この場は、何と答えたらいいのか、皆目見当もつきません。
「聞きいているのか、ズコ！　何でこんな大それたことを！」
「ハイ、池でホサピが溺れていたから、助けたのです。アプと力を合わせて岸に引上げたのですが、動かないので…、体に触ってみただけです」
ズコは途切れ途切れに言葉を選んで答えました。
「バカ者！　ホサピが溺れた仲間を助けると思うか。普通のホサピは水を怖がり、近づくことさえしない筈だ」
「ハイ、そうかも……」
「いつも言っているだろう、普通のホサピと同じに振る舞えと！
さっきの男が、直接市役所につき出したら、お前たちの命は危うかったのだぞ」

「ハイ、パーリオ様」
「今回の事件は極めて危険だった。このようなことを二度としないように、お前たちはしばらく謹慎だ！　ホサピ舎から出ることを禁止する」
そう言って、パーリオはホサピ舎に二人を入れると、外から鍵を掛けてしまいました。

二人がホサピ舎から出ることが許されたのは、謹慎から十日ほど経ったときでした。理由は、エントリーしていたホサピレースが近付いてきたので、トレーニングの必要があったからです。
「アプとズコ、今日から練習を始めるように。ただし、トレーニング以外は一切禁止だぞ。何ごとがあっても、お前たちはただ走ることに専念すること、分かったな」
「ハイ、パーリオ様。二度とミスは犯しません」
「よし、それでは気をつけて行って来い」
紫のシャツとパンツ姿で、二人は元気よくパーリオの屋敷を出ました。しばらくホサピ舎に閉じ籠っていたので、何時もより足は重く感じられます。それでも二人は人目のない旧道に入ると、本来のフォームに戻って走るスピードを上げます。そして、谷川に踏み入り、地底湖のある洞窟に辿り着きました。
「アプとズコ、久しぶりだなあ」
「ハイ、パーリオ様から謹慎を命じられていたものですから」
二人は同時に、源蔵爺さんに言いました。
「謹慎だって？　それはいったいどういうことなんだ」
源蔵爺さんの質問に、アプとズコは代わる代わる答えます。一部始終を話し終えたとき、ズコが涙を流しながら嗚咽しました。
「僕は悔しい！　悔しくて、悔しくて、もう我慢できない！」
ズコはテーブルにうつ伏せになって、肩を震わせます。その肩を、千佳婆さんが優しく抱いて言います。
「ズコは素晴らしいことをしたのですよ、この世で一番大切な人の命を救おうとしたのですからね」
「そうでしょう！　でも、僕は強姦だと……」
「そうね、誤解されてしまったのよね」
千佳婆さんは、震えの止まらないズコの背中を撫でながら、ズコの言い分を反芻（はんすう）します。
「僕は溺れた人を助けたかった、ただそれだけ。なのに、それを誰に言うこともできないし、絶対にやるなとパーリオ様からは叱られる

し……。いったい僕はどうしたらいいんだ！」
ズコはテーブルを拳で叩きながら叫びます。
「ズコ、よく聞け」
源蔵爺さんが、ズコの拳を両手で包むように握って強く言いました。
「人が生きるということには、いろいろな苦しみが伴うものだ。今回のズコの行為は人としてとても大切なこと、尊いことだよ。でもな、よく考えてみなさい」
その声で、少し冷静さを取り戻したズコが、伏せていた顔を上げて濡れた目を擦ります。
「ズコとアプが此処にきて、勉強をしているのは何のため？」
「それは、勉強が楽しいということもあるけど、イカタック星人に奪われた人間の世界を取り戻すこと、です」
ズコがきっぱりとした口調で言います。
「アプもそれでいいかな？」
「そうね、地球を人間のものに取り戻すためだわ」
源蔵爺さんは、二人の言葉に大きく頷きながら続けます。
「人間の世界を取り戻すためには先ず、イカタック星人の弱点を見つけ出さなければいけない、そうだね。それが見つかったとき、我々に勝つチャンスが生まれる。そのチャンスが到来するまでは、毎日どうしなければならなかったのかな？」
「僕らは、家畜のホサピとして振る舞うこと」
「そう、ホサピでないことがばれたら生きてはいけないし、地球を取り戻すこともできなくなる」
「それは分かるけど……、人の命は何ものにもまして大事では……」
ズコが眉間にしわを寄せながら呟きます。
「ズコ、この世には同時には叶わない、両立し得ないことがあるものだ。もし、そのような場面に出くわしたときにはな、大きな目的のために小さな目的は諦めたり捨てたりしなくてはならない」
「フーン、溺れたホサピが目の前にいても助けるな、ということ？」
「そうだ、辛いことだがそうするほかはないケースの一つだ。だがな、ズコ、もし我々がイカタック星人をやっつけて、人間の世界を取り戻したときはどうなる？」
「それはもう、何のためらいもなく池に飛び込んで助けるよ」
「そう、そうだよね、人間が人間らしく生きられるようになる！」
「そうよ、だから私たちは何ごとにも耐えて、耐えて、耐え抜いて、必ず人間の世界を取り戻すのよ」
アプも熱くなって、大きな声で叫ぶように言いました。

8

今年も紅葉杯でアプとズコが出場するホサピレースはすべて終わりになります。そのレースが始まる前に、パーリオは二人に指示を出しました。前年の覇者であるズコにはトップ争いの末に優勝を逃す走りを、アプにはズコに次ぐ上位を狙うようにと。パーリオは、所有するホサピが二年連続で優勝をしては強さが目立ち過ぎると考えたのです。

スタートのゲージが開くと、アプとズコは飼い主から命じられたとおりの走りに徹しました。良いスタートを切ったアプが中盤までトップに立ち、レースを引っ張ります。アプの背中を追っていたズコが、最終コーナーに差し掛かったところで追い越します。そのズコのすぐ後ろにドラゴンキッズが迫ってきました。昨年はゴール直前で追い抜いたライバルのホサピです。ゴールが目の前に迫ったとき、ズコは意識して体を左右に大きく振りました。それまでのスピードが少し緩んで、ドラゴンキッズが脇を素早く駆け抜けて行きます。

紅葉杯レースの着順は、ズコが二位でアプが四位という結果になりました。それでも、シーズンを通した成績では、夫々が三勝ずつの好成績を収めていたので、パーリオとその妻のペクールは大いに満足しています。

レースがない冬の間は、昨年と同じように二人はホサピ牧場の体育センターで過ごすことになっていました。冬季のトレーニングに向かう前夜に、パーリオ夫妻は二人の活躍を労う夕食会を、食糧倉庫の中に設えたテーブルで開きます。

「アプとズコ、今年もよくやった。出場レースでは言いつけ通りに走ってくれたから、ワシは大いに満足しているぞ」

パーリオは、上機嫌でワイングラスを傾けています。

「私からも褒めてあげるよ。夫の収入なんて、お前たちの稼ぎに比べれば、無視できるほどだから」

「おいおい、ペクール、何ていうことを！」

「あら、御免なさい。冗談ですよ」

妻のペクールも、飲み慣れないワインに顔を赤く染めて言います。

「私たちは本当に幸せなホサピです。これからもっともっと練習をして、いつでも勝てるように頑張ります」

アプとズコは、頭を下げて夫妻に挨拶をしました。その二人を見て、パーリオ夫妻はますます上機嫌です。アプとズコは、夫妻から勧められるままにビフテキやハンバーグなど、食べたいご馳走をお腹いっぱい食べて、食後のスイーツを頬張っていました。

「明日からは慣れないホサピ牧場だわね、宿舎は寒くないかえ？」
ペクールがそう言って、二人を気遣います。
「有難うございます、奥さま。この家ほど暖かくはないけど、去年はそんなでも……」
「でも寒いときにはね、これをお使い」
そう言って、ペクールは紫の手袋とレッグワーマーを差し出しました。
「奥さま、有難うございます。大切に使わせていただきます」
アプとズコは妻のペクールに何度もお礼を言って、頭を下げました。
会食が終わって、一行は食糧庫から外に出ます。ほろ酔い機嫌のパーリオ夫妻は屋敷の中に、アプとズコはホサピ舎に戻ります。
「何か、変な気分になってしまいそう」
ホサピ舎に入ったズコが、アプに話し掛けます。
「変な気分って、どんなふうに？」
「こんなに大事にされると、今の生活も悪くはないなあ…なんて」
「バカなことを！　そんなことは、二度と言わないで」
アプは血相を変えて、ズコを睨みつけます。
「ごめん、分かっている。分かっているけどパーリオ夫妻も優しいし、何から何まで大事にしてもらえるから」
「それはね、私たちが立派なホサピを演じているからよ」
「それは、そうだと思うけど……」
「言っておくけど甘い考えは禁物よ！　私たちの正体がばれたときには、私たちは殺されるのよ。私たちは奴らの家畜なのよ！」
「ウン、分かっている」
「イカタック星人は私たち人類を滅ぼした敵、だからいつも心を鬼にして立ち向かわなくてはいけないの」
アプは、愛らしいその口を一文字に結んで、きっぱりと言いました。

アプとズコは、十一月の下旬に身の回りの品を取りまとめて、パーリオが運転するワゴン車に乗り込みます。そして、昨年と同じ体育センターの宿舎に落ち着きました。二人の世話をする係も昨年と変わらず、中年婦人のチロロでした。
「久しぶりですね、チロロさん。今年もよろしく」
部屋に向かう廊下を歩きながら、アプとズコが交互に声を掛けました。しかし、チロロは無言で、両手に提げた荷物が重たそうに歩いています。二人は、チロロは言葉を失っているから仕方がない……と諦めて、それぞれの部屋の前まで来ました。
「有難う、荷物はそこに置いて」

アプがそう言ったとき、チロロは両手に抱えた荷物を足元に置いて、アプの前に回りました。そして、アプの手を両手で握りしめ、膝を小さく屈めます。その顔は満面の笑みで久々に会えた喜びを表していました。

「私のこと、覚えていてくれたのね、嬉しいわ！」

アプは思わず大声をあげ、チロロの手を強く握り返します。

「僕のことも、覚えている？」

ズコが脇から声を掛けます。チロロはアプの手を離して、今度はズコの手を握って頬笑みます。そして二人に身振り手振りで、『何でも言いつけてくれればやりますよ』という仕草をしています。

「春が来るまでお世話になります、よろしくね」

アプとズコの言葉に大きく頷き、チロロは戻って行きました。

「やっぱり僕らのことを覚えていたんだね、源蔵爺さんの予想通りだ」

ズコが感心した顔で言います。

「そうね、言葉は失っていても、ホサピたちと意思の疎通はできるみたい」

アプも安心した表情で相槌を打ちます。地底湖のある洞窟で、源蔵爺さんと話し合ったことの中に『ホサピたちを味方につけることができるかどうか』という課題がありました。その課題は、最初の日に、チロロとの再会で出来そうな気がしてきました。

年末の寒い朝、理事長室の廊下で着替えを済ませたアプとズコは、出勤してきたパーリオと顔を合わせました。午後の三時までは、黄色のコスチュームで乳児舎や幼児舎で育児を手伝うことは、昨年と変わってはいません。二人は、パーリオの後について、増産所の玄関を入りました。

「お前たちのトレーニングは順調かな？」

「ハイ、パーリオ様。夕方の走り込みに加えて、育児のお手伝いは上半身の運動になっているようで、調子はとてもいいです」

二人は、声を揃えて答えます。

「そうか、それは良かった。しかし、油断はするなよ」

「ハイ、この黄色い服を着ていれば、目立ちませんから」

ズコがそう言って、自分の胸のあたりをポンポンと手で打ちます。

「そうだ、今日は木馬乗りの日だったな。ズコは一度、見ておいた方がよさそうだ」

「何ですか、その木馬乗りの日とは？」

ズコが、好奇に満ちた顔で訊きます。

「現場を見ればすぐにわかるが、男のホサピの通過儀式だ」

パーリオは、そう言って研究所の脇を通り過ぎます。通路を右に折れると授産所があり、その隣に周産期棟が並んでいます。さらにその先にある建物は何か分からず、源蔵爺さんとの話し合いでは見取り図にクエッションマークを付けたところです。

謎の建物の中に入ると、赤いコスチュームのナースホサピに出くわしました。ナースのコスチュームといっても、それは自衛官が着る軍服に似た作りで、女もいれば男もいます。その原色に近い赤い服のナースが行き来する廊下を進むと、左手に体育館に似た部屋がありました。そこには小学六年生くらいの男のホサピが沢山いました。

「この男子たちは何をしているの？」

アプが、樽に籠ったパーリオに尋ねます。

「ウーム、まあ、分かりやすく言えば身体検査かな」

ホサピたちは手前と奥の二つの群れに分かれています。手前に立つホサピたちは白い服を順繰りに脱いで、金の樽に入ったイカタック星人の診察を受けているようです。大抵の男子は診察が終わると服を着て、奥の群れに加わります。一頭のホサピ、体が飛びぬけて大きい男子が、奥ではなくて入口に出てきました。そのホサピは、赤い服のホサピに連れられて玄関の方に歩いて行きます。

「あの体の大きな子はどこに？」

ズコが、パーリオの顔を見て訊きます。

「あの子はいま、種ホサピに選ばれたのだよ。これからは学童舎を出て、塀の中で暮らすのさ」

「フーン、ちょっと可哀そうね」

「まあ、何とも言えんがね……」

アプの言葉に歯切れの悪い返事をしたパーリオは、キャスター付きの樽を動かして奥に進みます。

「ズコに見せたいのは、この部屋だよ」

そう言って、パーリオは研究所のように覗き窓のついた部屋の前に樽を停めました。その樽の両脇に並び立って、アプとズコは中を覗きます。

「アレ、木馬が五つ並んでいる。これは木馬というより、立派な鞍（くら）ですね」

ズコが大きな声をあげました。すぐに左手から赤い服のナースホサピが入ってきました。そのあとに、白い服を着た五頭のホサピがついてきます。先ほど、体育館のような建物の中で、身体検査を終えた男子ホサピたちです。赤い服のホサピは、その一頭一頭に木馬に乗るように促します。体が小さくて、うまく乗れないホサピには尻を押して

乗るのを手伝っています。五頭が木馬に跨り、頭部の棒を握ったところで赤い服のホサピは部屋を出ました。それと同時に、ブザーが低く鳴るような音が二、三十秒間響き渡ります。
「何ですか、これは？」
ズコが不安な面持ちでパーリオに訊きます。
「これは木馬乗りといってな、男子が十二歳になる前に受ける儀式だ」
「一体、何をしたのですか？」
「睾丸に放射線を当てて、去勢をしたところだ」
パーリオは、ビジネスライクに答えます。
「そんな、残酷な！」
アプとズコは、思わず小声で叫びました。
「お前たちは普通のホサピの筈だよ、そのような言葉は慎むように」
「ハイ、分かりました、パーリオ様」
表面はおとなしく答えながら、二人は怒りと悲しみを懸命に押し殺していました。儀式が終わった五頭のホサピたちが木馬から降りると、次の五頭が入ってきました。彼等は先を競って木馬に跨ろうとしています。よく見ると、木馬の向こう側にも小さな覗き窓があって、そこから装置を操作するイカタック星人の顔が見え隠れしていました。
「ズコはこの夏、溺れた女のホサピを助けようとしたことがあるよな」
パーリオが、ズコの肩に吸盤だらけの手を置いて話し掛けます。
「ハイ、助けることができないかと思って、体に触りました」
「その結果はどうなった？　強姦と間違えられたよな」
「ハイ、その通りです」
ズコは苦い経験を持ちだされて、項垂れます。
「そのようなことは二度としてはいかんぞ。もう一度やったら、ズコも容赦なくこの木馬に座らせるからな」
「ハイ、もう絶対に、二度としません」
ズコは恐怖に震えて答えます。比較的に冷静を保っていたアプがパーリオに話しかけました。
「向こう側で、この装置を動かしている人がいますね。パーリオ様、できたら運転装置も見せてくださいませんか？」
「ああ、ズコが絶対に忘れないように、中も見せてやろう」
そう言って、パーリオは覗き窓の右手にあるドアの前に立ちました。そして、インターフォンに向かって話しかけます。
「理事長のパーリオだが、中を見せてくれないかな」
「あ、理事長。今日は施設内の見回りですか？」
パーリオの突然の訪問に、少しうろたえた返事です。
「いや、見学者を連れてきたから、少しだけ見せてやってくれ」

「分かりました、取っ手の上にあるダイアルを廻してください。ゼロ一、ゼロ二、ゼロ三ですから」
「えらく簡単な番号だな」
「ここを開ける人などいませんよ、理事長。それに、複雑な数字を覚えておくのは煩わしいですから」
インターフォンで話しながら、パーリオはダイアルを回します。そして、ドアを開けて中に入りました。
操作室は航空機のコックピットに似ていました。操縦席にあたる部分は樽形になっていて、中にイカタック星人の技師が籠っています。操縦する技師は、正面の小窓から五台の木馬を見渡せるようにできていました。
「あれ！　理事長、見学者とはホサピですか」
操作台に籠っていた技師は、入ってきたズコたちを見て驚きます。
「ウン、この二頭はワシのレース用でね。なかなか良い走りをするが、オスの方は去勢をしたくないのでしっかりとした躾をね、絶対に若いメスには手を出さないように」
「よく分かりました、理事長。ここを見学したオスのホサピには、最高の躾になりますよ」
そう言って、技師は仕事に戻りました。彼は、五頭のホサピが木馬に跨って握り棒に捕まるのを確認すると、操縦席の中央にあるレバーを手前に引きます。すると、先ほどの低いブザーの音が一段と高く響き渡りました。それが終わると技師は、ディスプレイに表示されたデータに放射線照射をした日時を追加して、次のホサピと入れ替わるのを待っています。
二、三回の去勢作業を見終えたとき、パーリオが技師に声を掛けました。
「狭いところでの作業はご苦労だが、しっかり頼むよ」
「ハイ、頑張ります。理事長」
「それではどうも、世話を掛けたな」
そう礼を言って、パーリオたちは操作室を出ました。
「この木馬乗りは、毎日ですか？」
ズコがパーリオに訊きます。
「いや、週に二回、月曜と木曜日だ。一度に百頭前後になるかな」
パーリオは、理事長室の方に戻りながら言います。その後をアプとズコがついて歩き、幾つかの質問をしています。周産期棟の前を過ぎて、授精所まで来ました。小さなクーラーバッグのようなものを抱えたホサピが建物の玄関を入って行きます。
「あのハウスキーパーのホサピは、何を運んでいるのですか？」

アプが、パーリオに尋ねます。
「あれは授精用の精子だ。研究所で製造した精子は小分けをして、冷凍保存をしてある。授産所でその日に必要な分を取り出して、ハウスキーパーのホサピに運ばせているのだ」
「へー、いつでも必要な数が揃うわけですね。それでは、種ホサピから採った精子は？」
「新鮮なうちに処置しないといかんから、時間との勝負だ。技師が採取したら、自動運搬装置ですぐ研究所に送られる。地下に輸送用のパイプが埋め込んであるという訳さ」
パーリオは、得意気に話しながら先に進みます。一行は研究所の裏口から玄関まで戻ってきました。
「パーリオ様、今日は有難うございました」
「ああ、とくにズコはな、いま見たことを忘れるなよ」
パーリオは、そう言い残して研究所の玄関から出て行きます。アプとズコは、その後ろ姿を直立不動で見送っていました。

一月下旬の寒い朝です。その日の気温は氷点下十度で、小雪もちらついていました。アプとズコは紫色のトレパンにジャージ姿で、宿舎を出ます。顔や耳が寒さや冷たさを超えて、痛くてたまりません。ペクールがくれた手袋が、二人にはとっても有難く感じられました。
数分の走りで、理事長室の専用車庫につきました。その廊下で、黄色い服に着替えた二人は、増産所の玄関を入ります。
「いろいろなことが分かってきたけど、塀の中がまだだわね」
廊下を進みながら、アプがズコに話し掛けます。
「あそこには女は入れないようだから、僕が一人で調べるしかないかな」
「そうよ、だから今日からは別々に分かれて動こう」
ズコは、アプと別れて塀の近くに立っていました。黄色い服の男のホサピたちが行き来しています。その中に、仲良しになった小柄なホサピがいました。彼は、サプライセンターから、種ホサピたちが着る衣服や歯磨き、タオルなどの日用品を運んでいたのです。
「荷物が重たそうだね、手伝おうか？」
ズコは、小柄なホサピに近づいて声を掛けます。ズコに気付いたそのホサピはニコッと笑って、ここで待っていろという仕草をしました。そして、塀の中に入って行きます。すぐに戻ってきたそのホサピは、自分についてくるようにという仕草です。ズコは黙ってそのホサピの後についてサプライセンターに入りました。
妊婦棟の隣にあるサプライセンターには、資材が山積みにされてい

ました。その資材の中で、青い服を着た労務用のホサピが沢山働いています。彼等は、ごく少数のイカタック星人の命令に従って、コンテナから取り出した資材を黙々と運搬しています。入口の左脇に積まれた小さな山が、塀の中に運び込む資材のようです。ズコは、小柄なホサピを真似て、中ぐらいの段ボール箱を抱えました。そして、塀の方に向かいます。

塀の入り口は、高さが二メートルほどのトンネルになっていました。ドアはなくて、素通りすることができます。薄暗い通路は左に大きく曲がっていて、すぐに黒いドアに突き当たります。そのドアは、トンネルの壁と直角ではなく、百二十度位の角度に取り付けられていました。壁とドアがVの字をなして、行く手を阻んでいるのです。

先を行く小柄なホサピは両手に段ボール箱を抱えたまま、肩で斜めに取り付けられたドアを押しました。簡単に開いたドアは、小柄なホサピが通り抜けると、パタンと音を立てて閉まります。塀の内側から差し込んできた光が消えて、目の前が暗くなりました。一瞬、ズコは戸惑いましたが、思い切って肩でドアを押してみました。何の抵抗もなくドアは開いて、ズコが通り過ぎるとすぐに閉まりました。

ズコは振り返って、閉じたドアの方に目を向けました。しかし、そこは黒い塀の出っ張りで、出入り口とは到底思えません。鋭角に飛び出した壁は、先端恐怖症の人でなくても近寄りがたいものがあります。ズコは段ボールを足元において、先の尖がった部分に近づきました。いま入ってきたドアの部分、塀の内側からは斜めになった壁面を押してみました。しかし、幾ら押しても開きません。さりとて手前に引こうにも取っ手がありません。塀の中のホサピには近づき難い構造で、しかもドアを開けられない仕組みになっているようです。読者の皆さんには、定置網に入り込んだ魚が出られなくなる仕組みを想像して頂ければ理解しやすいかと思われます。

「なるほど。簡単に入れても出ることは叶わない……ということか」

ズコは、そう呟きながら足元に置いた段ボール箱を抱え上げます。高い黒壁の左右には、数個の出っ張りが設えてありました。そのV字型になった壁の右側が開くたびに、黄色い衣服のホサピたちが荷物を抱えてきます。それらに交じって、青い服のホサピが手押し車に資材を山と積んで入ってくることもありました。

「ズーズー、ズーズー」

そういいながら、ズコの背中を手でつつくものがいました。ズコの先導役を買って出た小柄なホサピです。彼は、グランドに立ち尽くしているズコに、早く荷物を運ぶように促しています。ズコは慌てて校舎のような建物に入り、抱えていた段ボール箱を所定の場所に置きま

した。

建物から出たズコは、小柄なホサピの後について黒塀の左端に向かいます。そこには仕切りでブラインドになったV字型の出っ張りがあって、ドアは開いていました。荷物を運び終えたホサピたちは、その開いたドアから外に出て行きます。ズコも開いたドアに近づいて、なぜドアが開いているのかを観察します。答えは簡単でした。開いたドアの下辺に、突っかい棒が掛けられていたのです。そして、ドアのすぐそばにはイカタック星人の見張りがついていました。

「あの黒壁のドアを、塀の内側から開けるにはどうしたらよいものか、君は分かる？」

無駄なことだとは思いましたが、ズコは隣を歩くホサピに訊いてみました。しかし、小柄なホサピは首を横に振るばかりです。

「しばらくの間、ここで手伝いをしてもいいかな」

身振り手振りを交えて、ズコは頼みました。小柄なホサピは、歓迎するよ、という表情で何度も頷いています。

一方、アプは何をしていたのでしょうか。彼女は、妊婦棟の奥深くに入り込んで、中の様子を事細かく観察していました。もちろん、黄色のコスチュームに身を固めたハウスキーパーとして、妊婦のお世話をすることがアプの表向きの役割です。

妊婦棟には毎日二十から三十頭の若い女のホサピが送り込まれてきます。増産所と牧場で躾や職業訓練を積んだホサピたちは、十五、六歳で売られてゆきますが、女ホサピの場合は数年間の契約で、二十歳になると牧場に戻ってきます。そして、白い装束に着替えて、受胎から出産までの期間をここで過ごすことになっていました。

妊婦棟に入所したホサピたちは、簡単な身体検査の後に、受胎準備室というところに入ります。ここで毎朝、基礎体温を測定して、低温期に入った日に向かいにある授産所で人工授精を受けます。人工授精が終了したホサピたちは、受胎準備室から一般妊婦室に移ります。その後はそれぞれの役割、たとえばハウスキーパー役は黄色、教師役は緑色、ナース役は赤色の服に着替えて、増産所や牧場の中で働く仕組みになっていました。

妊娠の初期に、悪阻（つわり）がひどかったり、体調がすぐれなかったりして働けない場合には白い服装に戻って、妊婦棟の中で療養します。また、月数が経って妊娠中毒症やさまざまな合併症が起こったときにも仕事から離れて療養する決まりです。アプは、そのような妊婦のお世話をナースホサピやほかのハウスキーパーたちと一緒に手伝っていました。

アプは、健康な妊婦たちが外出する際のルールも詳しく調べました。それは、地底湖のある洞窟で話し合ったときの宿題の一つでしたが、人工授精が終わったホサピは、妊婦棟の入口にある事務所に外出を申し出ます。事務所にはイカタック星人の係員がいて、簡単な身体検査の後に許可を出します。許可といっても、許可証などが交付されるわけではありません。そのホサピが入所する前に着ていた衣装が入っているロッカーの番号が教えられるだけのことです。外出が許されたホサピは、まず、事務所の奥にあるロッカールームに入ります。そこで白い服を脱いで、夫々が入所前に着ていた服を取り出して着替えます。そして、事務所から指示された仕事場に出向いていくのです。

最初の外出のときにはチェックを受けますが、二回目からは面倒なことは一切ありません。妊娠したホサピたちは朝食が済むとロッカールームで着替えをして、元気に仕事場に向かいます。人手不足とトラブルの発生が全くないことから、イカタック星人も実にのんびりとした対応をしていました。中には樽の中に頭を突っ込んだまま、居眠りを決め組んでいる係員もいたくらいです。

お彼岸が過ぎたある日、アプとズコは紫の衣装に着替えて体育センターに向かいました。ホサピたちが学童舎に引きあげた体育館はシーンと静まり返っています。その広い体育館をジョギングしながら、アプがズコに話しかけました。

「冬季トレーニングも今週で終わりね。塀の中はよくわかった？」

「ウン、仲良しになったホサピが協力してくれてね。塀の中から出る方法も種ホサピたちの生活ぶりもみんな分かったよ」

「イカタック星人の見張りも？」

「ウン、昼間は少しいたけど、午後から夜にかけては誰もいなくなる」

「そう、良く調べたわね」

「アプの方はどうなの？」

「私もバッチリ調べたわよ。妊婦棟は入所の時はね、身体検査や人工授精があるから監視が厳しいの。だけど、そのあとは何もないと言ってもいいわね。健康な妊婦はみんな自由に出入りをしているわ」

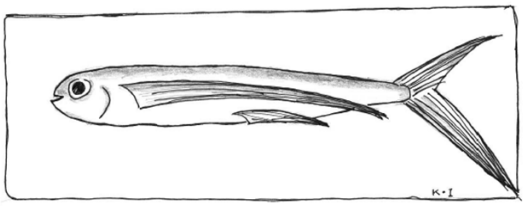
「そうか、早く源蔵爺さんや千佳婆さんに会いたいな」

「そうね、私たちが調べたことを早く教えてあげたいわ」

ジョギングに励む二人の心は、早くも地底湖のある洞窟の中に飛んでいました。

〈以下、次号〉

とびうお



中川　とら

スーパーの魚売り場で、今日もとも君はとびうおをじっと見て動きません。

「とも君、行くわよ」

少し離れた所でおかあさんが呼んでいます。とも君はうらめしそうにおかあさんを見て、小さい声で言います。

「とびうお　買ってちょうだい」

おかあさんはくちびるをかたく結んで、また頭を横にふりました。魚が海の上を飛ぶなんて、なんて不思議ですごい事でしょう。絵本で見たことはありましたが、テレビで実際に見た時のとびうおはものすごい速さでしぶきをあげながら、勢いよく跳ね上がっていました。胸びれはまるで鳥の羽根のようです。しかも、それが何匹もつづきます。とも君の胸はドキドキして、その日いらいすっかりとびうおのとりこになってしまったのです。それからというものスーパーの魚売り場に来ると、ほしくてほしくてたまらなくなります。だからおかあさんにダメと言われても、泣きたい気持ちをじっとがまんしてとも君はあきらめません。いつかきっと、おかあさんは願いを聞き入れてくれるに違いないとかたく信じているのです。

やがて、スーパーを一回りして来たおかあさんが小さい声でつぶやきました。

「そろそろ、とびうおは南の島へ帰ってしまうわね……」
そうしてなんと、トレーに入ったとびうおを一尾買い物かごにいれてくれたではありあませんか。
帰り道、うれしくてとも君は何度もスキップしたり走ったり跳んだりしました。時々買い物袋をのぞいて、「こらこら」とおかあさんに注意をされます。道端のセイタカアワダチソウが黄色く群れて笑っています。ススキが寄りそうようにそのそばで揺れています。立ち枯れたヒマワリの実をシジュウカラがつついて、スズメがこぼれた実を食べています。おかあさんは知っている人と会うと、呼び止めておしゃべりをはじめます。買い物袋を何度も持ちかえて終わりそうにありません。少し先に行って、とも君は大きい声で言いました。
「おかあさん、はやく帰ろう」
テーブルの上に夕ごはんの支度ができました。とも君のお皿には、大きな目をあけて翼のような胸びれをおろしたとびうおが、静かに横たわっています。焦げ目のついた体に雪のような塩を少しのせています。とも君は、うれしくてお箸を持って足をバタバタしはじめました。
「八丈の海からようこそ」
おかあさんは、お皿の上のとびうおにいいました。それからテーブルの真ん中のガラスボールに向かって「そうそうタコさんは西アフリカから、メバチさんは確かインド洋、サーモンさんははるばるチリの国からかしら、みなさん世界の海からようこそいらっしゃいました」と深々とおじぎをしました。
「そうだ、イタリアから来たあなたにもいつもお世話なってありがとう」
オリーブオイルのびんを手にとったおかあさんのほほは、少し興奮しているのでしょうかもも色です。マリネにオイルをたっぷりかけて食べるのがおとうさんの大好物なのです。
とも君は、楽しくて、楽しくてどうしようもなくなり、「きゃっきゃ」と笑いながらもっと足をバタバタし始めました。するとおかあさんは人差し指を口にあてて、
「しっ、ず・か・に！　下のおうちにひびきます」
こわい顔をしてとも君をにらみました。
「おかあさん、これはどこからきたの」
小さい、小さい声でとも君は、ポテトサラダにそえたパセリを指さしました。
「それはね、二階のおばあちゃんのベランダ」
「ベランダ？」

「そう、ミニトマトといっしょにやって来たのよ。きゅうりとにんじんは千葉の畑。じゃがいもは北海道からね、そしてオレンジジュースはえーと、まあ、ブラジルだわ、遠くからご苦労さまですね」
魚も野菜もみんなピカピカ光って新しい生命に変わるその時を待っています。おかあさんと、とも君は心の中で「ありがとう」を言って手を合わせました。
「いただきまーす」
おかあさんは、とも君のとびうおをおはしで上手にほぐしてくれます。どれもこれもなんておいしいのでしょう。
「おかわり！」
とも君は元気いっぱい小さなおちゃわんをさし出しました。その時です。玄関のチャイムが「ピンポーン」となりました。
「はーい」
おかあさんは急いでドアの前に立ち「どちら様ですか？」と聞きます。
「となりに越してきました北山です」
そう言えば、昼間大きなトラックが階段の入口に止まっていました。ドアを開けると、おばさんと小さな女の子が立っていました。女の子はとも君と同い年くらいでしょうか、まるい大きな目でじっとこちらを見ています。
「どちらから？」
「山梨です。よろしくお願いします」
「こちらこそよろしく、なかよくしてね」
おかあさんは、女の子にやさしく言いました。

ご飯が終わってお腹はいっぱいです。そろそろまぶたが重くなってきました。とも君はおかあさんに言いました。
「ねえ、おかあさんぼくはどこから来たの？」
洗い物をしていたおかあさんは、ほほえみながら振り向いてとも君を見ました。
「とも君はね……遠い宇宙からきたのよ」
「うちゅう？」
「そうだ、宇宙の音をきいてみる？　いらっしゃい」
おかあさんは、とも君をひざに乗せてそっと抱きしめました。やわらかくて暖かいおかあさんの胸。とも君はそこに耳をあてました。
「ドクドクドク、ドクドクドク」
どこかできいたようなつかしい音です。おかあさんのひざがゆっくりゆっくり揺れはじめました。

「ドクドクドク、ドクドクドク」

おや？ここはどこでしょう。白いもやのような中に水の音がきこえてきます。さっきおかあさんの胸できいた音も遠くでなっています。とも君は、もやの中を一歩一歩進みました。やがてかすかな明かりが見えてその中を何かがくるくる回っているではありませんか。近づくほどにそれはキラキラと光りはじめます。とび魚です！　胸びれを翼にして銀色に光って飛んでいます。いいえ、よく見るとサケもいます。メバチもタコも気持ちよさそうにクルクルと回っています。まるでおどりを踊っているようです。

ここがおかあさんの言った宇宙なのでしょうか。とも君は明かりの中に入っていきました。

光はオレンジ色に変わって、つぎに透明なみどり色になりました。なんと、今度はパセリがニンジンがジャガイモが、そしてオリーブの実が回りはじめました。よく見ると遠くに女の子がいます。ピンクの髪かざりをつけ白いワンピースを着て、楽しそうにダンスをしています。

たしか今日訪ねてきた女の子です。

そのうち、おかあさんの胸できいた音はきこえなくなりました。そのかわりに、今度はかすかに音楽がきこえてきます。ピアノのようなハープのようにもきこえるその音は、しだいに近づいてきて近づいてきて、やがて大きなシンフォニーになりました。光はますます色を濃くして回りはじめます。とも君はすーとその外に出されました。もう魚たちはみえません。女の子もいなくなりました。そうして光の束は目の覚めるような赤い色になり、最後に一本の線になりました。

演奏がおわりました。静けさの中に、またあの音がきこえてきます。

「ドクドクドク」

よくきくと、それはとも君の中からきこえてきます。

「ドクドクドク」

「お家にかえりたいな」

心ぼそくなったとも君は大声で言いました。

「おかあさーん、どこにいるのー」

「とも君、とも君起きなさい！」

とも君はおかあさんのひざで目をさましました。

「ほら、見てごらんなさい。お月さまがまんまるよ」

おかあさんは窓の外を指さしました。今夜は十五夜だったのです。

とも君は眠い目をいっしょうけんめいこすって、もうすっかり暗く

なってしまった夜空を見上げました。ほんとうに、なんて大きなお月さまでしょう！

「あっ、とび魚！」

なんと月の光の中を、たくさんのとびうおたちが銀色に光って飛んで行くではありませんか。きっと南の海に帰っていくのでしょう。

「さようなら　とびうおさん　またきっときてねー」

とも君は夢の中でおわかれを言いました。

おわり

「印旛文学の会」について

・本会は、「印旛文学の会」と称し、文芸「草の丘」を年に2回発行する等の活動を行う。

・文芸「草の丘」は、簡易製本の冊子を若干部発行するとともに、ウェブサイトに全文を発表する。

・会員は、印旛地域に関係がある、もしくは関心がある人で、詩や小説、随筆等を創作し発表する人とする。

・会員は、年会費2千円を負担する。年会費では対応できない費用が発生した場合には、会員はその費用を分担するものとする。

・会員は、自作の未発表作品を投稿できるが、掲載については編集会議でその可否を検討する。

・その他、会の運営に関する重要事項の変更については、合評会等の場で、会員に諮って決するものとする。

続・太鼓持ち
我ラ絶ユルコトナシ

唐瀬　光

1

ぽつぽつと咲くさざんかの花が淡い彩りを添えている。

水村はもうすっかり暗くなった両国の裏通りを、肩を揉みながら歩いていた。

終日事務所にこもっていると、かなりの疲労を感じる。終業時間が終わる頃になると、休憩を兼ねて会社の周りを散歩するのが日課になっていた。退社時間になったからといって、すぐ帰宅できるわけではない。片付けなければならない仕事が山ほどあるのだ。

しばらく歩きまわって気分転換したところで、会社のビルに戻って来た。さあ、これからもう一踏ん張りだ。「よっしゃ！」と気合を入れて玄関のドアを開ける。とたんに前方からやって来る一行に出会って不愉快な気持になった。

向こうから四人の男が歩いて来る。いずれも水村のよく知っている顔だ。真ん中の人のよさそうな男が、先月親会社から赴任して来た川本社長。彼を囲むように三人の男がぴったりと寄り添っている。

社長の左右にいるのが、名にし負う我が社のイエスマン、常務の原島と総務部長の井林だ。中肉中背の原島は禿げあがった頭頂に、わずかに残る淡い髪をバーコードのように撫でつけている。彼は社長の方を

向いて、さかんにへつらいの言葉を並べていた。
原島は会社の人事を担当している。彼の下の名は『公平』といい、『社員皆平等。人事考課はいつも公平に』が彼の口癖だ。
一方、大きな黒ぶち眼鏡をかけ、ヒョロッと背の高い井林は、社長の重そうなカバンを抱えて、「ええ」とか、「まあ」とか、相槌ばかりを打っている。彼は上司に対して決して反論というものをしない。いや、反論できるような自分の意見を持たないのに違いない。
彼ら三人の後ろから、痩せた若い男がちょろちょろついて来る。今も水村の部下をしている古橋だ。こいつは、いつも『権力の臭いのする所に身を置く』という賢い性癖がある。
すれ違う時に、川本社長は水村の姿を目にとめて「おおっ」と小さく口元を緩めた。だが、ほかの三人は彼の姿がまるで目に映らないかのように、一瞥もせずに通り過ぎた。水村はエレベーターを待ちながら横目でちらちらと彼ら一行を眺めていたが、社長以外は一度も振り返ることなくビルの外に出て行った。今しがたこの広いロビーにいたのは彼らと水村だけで、いくら話に夢中だとはいえ、正面からすれ違った者に気づかないはずはないのだが。
水村は不快な気分でエレベーターに乗り、八階の本社事務所に帰って来た。
事務所にはまだ大半の社員が残っていた。仕切りの向こうから、かんかんがくがく声が響いている。衝立の間から覗いてみると、丸顔の営業部長が真っ赤な顔をして電話の相手に怒鳴っていた。その傍で数人の営業部員がなにかの打ち合わせをしている。熱気あふれるいつもの場面が展開していた。
ところが、こちらのシマ（総務部と経理部が机を並べている所）はいつもの通り閑散としている。水村の所属する経理部ではベテランOLの佐藤愛子さんと、入社二年目の渡辺綾さんがパソコンの画面と睨めっこをしていた。だが隣の総務部には、係長の前田以外もう誰もいない。その彼も、すでにコートを着込んでカバンを手に提げている。
「おや、これから接待かい。総務も大変だねえ」
水村は皮肉を込めて、前田にねぎらいの言葉をかけた。
「違いますよ。今日は帰るんです。いや、今日もですが……」
彼は申し訳なさそうに背中を丸めて事務所を出て行った。
「総務はいいよなあ。残業ナシだもんなあ」
ぼやきながら席に着くと、斜め前の佐藤愛子さんが顔を上げた。
「課長、古橋クンに言って下さいよ。彼、朝は遅いし、帰りは早い。あの子さえまともに働いていれば、私たちが毎晩残業することはないんです。なにせ、時間前にここを出て行くんですよ、時間前に！」

彼女のボルテージが上がる。隣の渡辺さんも水村を見つめていた。
「でも、常務や井林君に誘われるのだろう」
常務の原島は経理部長をも兼ねている。サラリーマンという種族は悲しいかな、上の者には逆らえない生き物なのだ。
「あの、ちょっとお伺いしますけど。あの子の直属の上司は課長ですよね。いくら常務に誘われたからといっても、課長に一言の断りもなく出て行くのはまずいと思います。それでは、秩序というものが成り立ちません。秩序というものが！」
愛子さんの目尻が徐々に吊り上る。
（秩序を守るって……。あいつに、そんな認識があるかどうか）
そう思ったが口には出さなかった。次第にネコ科の猛獣に変身しつつある愛子さんを前にしては、とても言い出せるものではない。
彼は机の上に山と積まれた請求書を手に取ると、黙々と印鑑を押し始めた。
しばらくハンコ押しをやっていると、あることに気がついた。交際費や会議費（この会社では、主に社員同士の飲み食いだが）の支払依頼書に、同じ店の領収書が頻繁に目につく。それは赤坂の飲食店のもので、店名は『ルーン』となっていた。その依頼書は総務の井林が起票し、振込先も井林の個人口座になっている。
（これは！）
前社長の時によくあったことなので、すぐピンと来た。同時に、先ほど川本社長を囲んで出て行った者たちの姿がよみがえった。
「ルーン……ルーン……」
呟きながらインターネットを開く。検索してみると、やはりクラブ。それもかなり高級店のようだ。ホームページには、漆黒のカウンターに寄りかかり、誘うような微笑みを浮かべている若い女の姿が写っていた。
彼らが店に通う頻度は、週一、二回にまで増えている。この調子でいけば、来月あたりには毎晩となるに違いない。
井林の書いた書類に目を通すと、参加しているのは川本社長と原島、井林。それに古橋。先ほどロビーですれ違った男たちだ。
そのほかにはと目を眇めて汚い文字をたどれば、出ました、出ました、エンマ工業の社長。前社長の皮崎（かわさき）と黒い交際の噂が流れた人物だ。おおむねこの五人が常連。一晩の飲み代は、もちろん十万円を超える。
川本社長は親会社から赴任して来たばかりの頃は、いかにも管理畑の生真面目な人物に思えたが、最近はかなりくずれて来たようだ。原島たちのヨイショが効いて来たのだろうか。
「あれだけカワサキにくっついていたくせに、失脚したとたん、あい

つの悪口を言い始めた。そして今度は川本社長にべったりだ。まったく、あの太鼓持ちどもが！」

水村が怒りにまかせて吐き捨てるように罵ると、傍から「しっ！」と制止する声が聞こえた。見ると愛子さんが唇に指を立てている。

「めったなことを言わないで下さい。誰がチクルかわからないのよ。『壁に耳あり、障子に目あり』ですからね、この会社は」

愛子さんは鋭い目で水村を睨んでいた。隣の渡辺さんも警戒心をあらわにしている。

まったく、その通りだ。あわてて周囲に目をやる。気まずい空気が流れ、水村は黙り込んだ。それから三人はいそいそと帰り支度を始めた。今夜の仕事はここまでだ。

ちょうどその頃、赤坂の裏街に一台のタクシーが入って来た。やがて一軒の黒い建物の前に止まる。ドアが開いて中からスーツ姿の男が四人降りて来た。その中の、まだ二十代とおぼしき若い男が黒塗りのドアに駆け寄り、呼び鈴を押す。ドアに掛けてある青銅のプレートには『ルーン』という文字が浮き彫りに見えた。若者の後から、中肉中背で白髪交じりの男がためらうようについて来る。彼はすぐ後ろに控えている頭の禿げた小柄な男を振り返って、心配そうにささやいた。

「なあ原島君、ここ高いのだろう。毎週こんな所に出入りしていいのか……」

「なにをおっしゃいます社長。高いったって、一晩十万円じゃないですか。こんなの代表取締役という御身分の方には、ごく普通の値段ですよ。前の社長なんかもっとすごかったですよ。さあ入りましょう」

原島は「さあ、さあ」と、うながすように川本の腕を取った。

「でも……会社の金を使うのだろう……」

「今夜はエンマ工業の円間（えんま）社長がお見えになるのです。ほら、社長も常日頃から工場の機械設備を充実させたいと、おっしゃっていたじゃないですか。今夜はその打ち合わせです。これはれっきとした会社の会議ですよ。会議に酒はつきものでしょう」

「でも、クラブで会議なんて……。それに、この費用は社員たちが汗水たらしてかせいだ金だから……」

「料亭での会議なんて、珍しくもなんともないですよ。飲み食いの費用を心配されているのですか。確かに社員は会社のためを思って働いていますが、その会社を束ねているのは社長です。つまり社員は社長のためにいるのです。だから、社員のかせいだものは社長が自由に使っていいのです。そうだろう、井林君」

原島は後ろを振り返って、若い総務部長の井林に同意を求めた。

「もちろんです。誰も文句は言いません。いや言わせませんよ。ですから社長はなんにも気にしなくていいのです。安心して下さい」
井林はメガネの縁に片手を添えて、自信たっぷりに言い切った。
「でも……この店はツケが利かないのだろう。井林君か誰かが立て替えて払っているのか？」
「まさか、僕だって薄給の身。何十万なんて大金は持ってませんよ」
彼は口に手を添え、川本の耳に「実は……機密費」とささやいた。
「機密費？」
「ほら、政府には機密費というものがあるでしょう。それと同じように会社にもあるんです。もちろん会社のとは違う口座になってます。店の金は一旦そこから立て替えて払うのです。後で経理に請求して埋めて置きます。それに、その口座は総務部長が、つまり僕一人が管理していますから、外に漏れることはありません」
「その機密口座とは、なんなのだね」
川本の問いに、井林は答えていいものかどうかちょっと迷った。だが、隣の原島がＯＫのサインを出すとヒソヒソと話し始めた。
「変な口座じゃありませんよ。社員の冠婚葬祭に使う慶弔金とか、退職者に渡す餞別なんかをプールしておく互助会の金です。みんなの給料から毎月五百円ずつ天引きしています」
「それじゃ、それは他人の金じゃないか。そんな金を、たとえ一時的にせよ勝手に使っていいものかね。経理の水村君に見つかったら、どうするんだ。彼、親会社の会計なんかと仲がいいそうじゃないか」
川本社長は不安そうな顔で井林の目を覗いた。
「まあ、まあ、まあ」
すぐ傍で二人のやり取りを見ていた常務の原島が割って入った。
「水村なら大丈夫です。騒ぎたてるようなら怒鳴りつけてやりますよ。それでも聞かなければ、工場かどこかへ飛ばします。彼の言うこと成すこと、ここにいる古橋君が逐一報告してくれますから、すぐわかります。まあ彼も、そこまで愚かなやつじゃないでしょう。それより社長、今夜もパァーッといきましょう。パァーッと」
原島は井林に目配せすると、「さあ、さあ」と川本を入り口へ誘った。
その時、黒い扉が内側から開いて一人の小柄な女が現れた。
「ダレデスカ、そこで騒いでいるヒトたち」
少女のように可愛らしいその子は、舌足らずな日本語で詰問した。だが川本の姿を見るなり、パッと顔を輝かせ、「カワモトさん！」と嬉しそうに駆け寄って来た。
「リリィ！」
この瞬間、川本の頭からはすべての心配ごとが消え失せていた。

彼は、まだあどけなさの残る東洋系の美女に腕を取られるまま、店の中に入って行った。

この様子に原島と井林は互いに薄く笑い合った。

店の中は壁も床も黒で統一され、いかにも高級感をかもし出している。カウンター席にはパリッとスーツを着こなした若い男が一人、水割りを傾けながら、優雅に足など組んでいた。黒い蝶ネクタイのバーテンが、彼のグラスに酒を注いでいる。

川本とリリィに続いて、原島ら三人が中にはいると「いらっしゃいませ」の挨拶とともに、一人の女が男たちを店の奥へと案内した。

コの字に並んだ豪華な革張りソファー。背もたれの後ろは観葉植物に囲まれ、周りから見えないようになっている。中央には重厚な木製のテーブルが置かれ、黒いベストのウェイターがバーボン・カクテルを、慣れた手つきで各人のグラスに注ぐ。それが行き渡ると井林が立ち上がって挨拶の言葉を述べ始めた。

「みなさま、今週のお仕事、ご苦労様でした。今夜はこの一週間の反省も込めまして、ここに総務部、経理部の合同会議を開催いたします。これは会議ですので、忌憚なき意見をどしどし発表して下さい。なお、飲み物や少量のおつまみなど用意してございますので、のどを潤しながらで構いません。では、まず始めに、原島常務に開催の言葉をお願いいたします」

挨拶の途中から「長いぞ！　とか、ハイ、会議はこれにて終了！」とかの野次を飛ばしていた原島が、グラスを片手に立ち上がった。

「それでは長たらしい会議はここまでといたしまして、これより懇親会を始めます。ご指名により、不肖この原島が乾杯の音頭を取らせていただきます」

彼はグラスを目の高さにあげると「社長始め、今週目覚ましいご活躍をされた皆様に乾杯！」と高らかに唱えた。するとホステスを含め『会議』出席中の一同、グラスを片手に「乾杯！」と唱和する。そして、一体いつあったのか会議終了後の懇親会が始まった。

その頃両国の本社では、水村がカバンを小脇に抱えて事務所を出るところだった。愛子さんや渡辺さんはまだ更衣室で着替え中だ。この着替えの時間が実に長い。いつもは、女子を最後に残すわけにもいかず、イライラしながら待っているのだが、今日は営業部に何人かいるので、早々に退出することにした。

ドアを開けて廊下に出た所で、グレーのスーツを着た大柄な男と出くわした。営業課長の住田（すみだ）だ。片手に大きなカバンを下げている。今

得意先から帰って来たところのようだ。
「よお、早いな。もう帰りか」
彼は水村を見おろすように声をかけて来た。
こいつとは皮崎前社長との闘争事件以来、腐れ縁が続いている。あれから、なにかにつけ水村を子分扱いにする。水村はいつの間にかこの男が苦手になっていた。
もともとこいつの言い出した『横暴な皮崎社長にバイクをぶっつけて、歩行不能に陥(おとしい)れる計画』は実行寸前のところでその必要がなくなった。皮崎がゴルフ後の飲み会で脳内出血を起こし、半身不随になったからだ。
(そりゃあ倒れもするわな。なにせ真夏の酷暑に、まる一日ゴルフ場を歩き回っていたのだから)
水村は『皮崎が倒れたのは本人の自業自得であって、計画のせいではない』と言いたかったが、彼はそうは思っていないようだ。二人だけになると、いつもあのことを自慢する。
「ああ、なんだかやる気がなくて……」
水村がぼやくと、彼は「あいつらのせいか」と意味ありげな表情を浮かべた。
「あいつら?」
「ああ、やつらがタクシーで西に向かったのを見た。あれは赤坂だな。いい御身分だよ、まったく……。どうだ、今夜飲まないか」
水村が同意すると、彼は「今、カバンを置いて来るから」と、大きな身体を屈めるようにして事務所の中に入って行った。
水村がエレベーターの前でぶらぶら待っていると、着替えを終えた愛子さんと綾さんのコンビが出て来た。
この二人の服装にはいつも驚かされる。毎日ファッションが違うのだ。ある日は超ミニのデニム。またある日はミリタリーショップで見かけるような迷彩入り戦闘服。
今日はと見れば、愛子さんの方は、(うわあ、宝塚!)。セミロングの黒髪を後ろになびかせ、上下とも濃紺のスーツに身を固めている。そのさっそうとした姿がとてもカッコいい。
一方綾さんは、(ロ、ロリータ!)。白いブラウスにフリルのついた水色のスカート。白黒縞模様のハイソックス。茶髪に染めているストレートの姫カットには、赤いカチューシャなんかをつけている。大人なのに中学生ぐらいにしか見えない。
彼女たちの服装に口を半分開けて見とれていると、愛子さんがツツツと寄って来て、「課長、誰かを待ってるの?」と尋ねて来た。
曖昧にうなずくと、「住田さん?」と聞いてから、「気をつけた方が

いいですよ。あの人、課長を自分の部下みたいに扱うでしょう。飲まれちゃだめですよ、飲まれちゃ」と念を押された。
「まあ、そういうことは……ないだろうが……」
言い淀んでいると、「待たせたな」と太い声がして、事務所から住田が出て来た。
熊のような彼の姿を目にした愛子さんは、「それじゃ、私たちこれで」と、綾さんを従え、そそくさとエレ―ベータに乗り込み、すばやく開閉ボタンを押して先に下りてしまった。
「なんだ、あいつら、乗っけてくれないのかよ」
ドアから早足で歩いて来た住田が憤慨する。
「お前が怖いのだろう」
からかうと彼は、「ひでえなあ、これだから女というやつは……」と、ぶつくさ言いながらエレベーターが再び上がって来るのを待っていた。
暗くなった両国の街をしばらく歩くと『伊賀屋』という看板が出ている。住田と水村が暖簾をくぐると、「ああら、久しぶり」と女将の声がした。ここに来るのは、あの皮崎事件以来だ。二人は目につかないように一番奥の席を取った。
「また始まったようだな」
席に着くなり住田がボソッとつぶやいた。
「始まった、って？」
聞き返すと、彼は「とぼけるなよ」と、水村の顔を下から覗いた。
「あいつらが赤坂のクラブに通っていると、みんな言ってるぞ」
「みんなって？」
「みんなと言ったら、みんなさ。ウチの社員だけじゃなく、得意先も」
「得意先も！」
「ああ、この業界は狭いんだ。面白い話しならすぐ広まるぜ。商談に行ってもその話ばっかりさ。まったく、あの連中ロクなことを……」
住田は困ったように坊主頭を掻いた。
「だからって、どうしたらいいんだ。川本社長に説教でもするか」
「まず無駄だろうな。社長は店の女に惚れ込んでいるんだ。それに周りにはあいつらがいる。俺は商談の報告に社長室に行くんだが、いつも原島か井林がいて聞き耳を立てている。目障りでしょうがないぜ」
彼はいつになく饒舌だ。よほど腹にすえかねているのだろう。
「川本社長も悪いが。真の悪人はヨイショをやっている、あの太鼓持ちどもだ。あいつらがいる限り誰が社長になっても同じことが起きる」
「では、あいつらをヤルのか？　ヤクザに頼んで」
「それは難しい。原島も井林も当社のプロパーだ。あいつらだって、若い頃は使命感に燃えてみんなの面倒をよくみていたものだ。今でも、

工場とか出先の者は本社の現状をよく知らないから、やつらを慕っている者が多い。俺だって入社したての頃は原島によく助けてもらった。その頃のやつは、理不尽なことがあれば社長にだって噛みついていた。でも、いつの間にか変わってしまった。堕落したのだなあ……」

住田は「あ～あっ」と溜息を吐きながら、自分のグラスにビールを並々と注いだ。

「あの石川五右衛門も言ったよなあ、『浜の真砂(まさご)は尽きるとも、世に太鼓持ちの種は尽きまじ』って……」

彼はぼやきながら、一気にグラスのビールを飲み干した。

水村は（そこは『太鼓持ち』ではなく、『盗人』だろう）と思ったが、口には出さなかった。

「今回は、俺もどうしていいかわからん」

彼はそう言うと、今度は水村を斜めから覗うようにした。

「お前も注意しろよな。あいつらの飲み食いの金は経理のお前が承認しているのだろう。監査とかで指摘されたら、責任を取らされるぞ。経理部長の原島がハンコをついていてもだ。あいつは、いざとなったら責任を押しつけて来る。『あの金は水村が勝手に出したもので、自分は言われるままにハンコを押しただけだ』って」

「そんなバカな……」

「責任は部下に押しつける。そんなことが、この会社ではよくある。今日は、お前にそれを忠告したかった」

住田はテーブルの伝票を摘んで立ち上がった。

「今日は、俺の持つ番だからな」

そう言うと、彼はレジに向かって大股に歩いて行った。水村もあわててついて行く。

水村たちが密談に耽っていた頃、赤坂のクラブ、ルーンでは宴もたけなわ。中央のステージでは原島と井林がマイクを交互に握って離さず、他の上品な飲み客のひんしゅくを買っていた。それはそうだろう、この高級な赤坂の店に、武田節や、お笑いコンビのものまね歌は、いかにもそぐわない。店の奥にはギターを小脇に抱えた専属歌手が、いまいましげに二人が歌い終えるのを待っていた。

奥のボックスでは、社長の川本と可憐なリリィが肩を寄せ合い、自分たちだけの世界に浸っている。二人とも英語で話しているから、周りの者には内容がわからない。そう、リリィはアジア圏だが、英語を公用語にしている国の生まれなのだ。一方、川本も若かりし日、同国に駐在した経験があり、かなり上手な会話ができる。

蚊帳の外に置かれた他のホステスたちは、隅の方で手持無沙汰にし

ている唯一の若者、古橋の方に集まった。いつもはクールな古橋も胸の奥が覗ける深Vワンピースの美女三人に囲まれては、さすがに熱くならざるを得ない。カクテルとはいえ、女たちに勧められるままにウイスキーをグイグイ飲んでは、さすがの彼もダウン寸前。ついにホステスの柔らかい膝に頭を乗せて、至福の荒い息を吐き始めた。

「遅れまして申し訳ございません。おや、みなさん、もう出来上がっていらっしゃいますね」

いくぶん低い声がして、中年太りの男がボックスに入って来た。エンマ工業の社長、円間誠一（えんませいいち）だ。

「おおっ、円間さん」

リリィといちゃついていた川本が、あわてて居住いを正す。

「おっと、そのまま、そのまま。気になさらないで下さい」

男はその丸い顔に下卑た笑いを浮かべ、両手で（そのまま、そのまま）と押しとどめる。彼が川本をはさんでリリィの反対側に腰を下ろすと、すぐ店の奥から年季の入った熟女が一人、小走りにやって来た。円間様専用のホステスだ。

エンマの社長が現れると、中央でマイクを握りしめていた原島と井林が、ようやくステージを下りて来た。他の飲み客も店の者も、一様にホッとした表情を見せる。

奥の特別席は円間を入れてまた一段と騒がしくなった。

それから一時間後、川本と古橋は完全に酔いつぶれてしまった。すると、黒いベストの男が店の奥から現れ、川本にやさしそうな言葉をかけながら裏口から外へ連れ出す。リリィも川本に添うようについて行く。その様子に原島と井林は互いに目配せして、小さくうなずいた。

川本がいなくなると、原島が「さあ、今日はこれにてお開きとするか」と、帰り支度を始めた。すぐ井林が札束のはいった封筒をカバンから取り出し、レジに行って代金を清算する。領収書の宛名には、しっかり『両国フーズ』と、会社の名前を書いてもらった。

一方、深酔いして一人で歩けない古橋は、原島に支えられてよろよろと表へ出て来た。そしてタクシーに押し込まれ、埼玉方面に走り去った。原島はタクシーが動き出す時、三万円を運転手に渡して行き先を告げ、「領収書と釣銭はこいつに渡して下さい」と頼んで置いた。

残った原島ら三人は、それぞれホステスを伴って、夜のネオン街をどこかへと歩いて行った。

2

それから二か月が過ぎた。川本たちの飲食費はうなぎのぼりに増え、

前社長皮崎の全盛期を彷彿とさせるものになって来た。
ただ、前回は社長の皮崎が率先して原島たちを連れ回していたのに対し、今回は原島と井林の二人が、意志の弱い川本社長をそそのかして遊興にふけっているという違いはあるが。
飲み屋も、皮崎時代は高級店を月火水木金と日替わりに通っていたのに比べ、今度は赤坂のルーンだけに絞っている。
経理課長の水村は、上司の原島が主犯では意見することもできず、悶々とした日々を過ごしていた。いつか伊賀屋で住田に忠告された言葉、『このままでは、お前が責任を取らされる』が頭にこびりつき、不安な思いが次第に膨らんで来た。
そんなある日のこと、彼は決算打ち合わせのため、日本橋にある親会社のビルに出向いた。そこの広い会議室には、子会社の経理担当が五十人ばかり集まっていた。壇上では親会社の指導員が期末決算の注意事項を事細かに説明している。
午前中の講習が終了し昼食時になったので、皆食堂に向かう。さすが一部上場企業の施設は豪華なものだ。広い食堂には何百人という社員が散らばり、セルフサービスのランチを食している。
水村がチキンカレーを一皿取り、誰もいないテーブルに着くと、アジフライ定食を盆に載せた初老の紳士が「ここ、いいですか」と声をかけて来た。水村は「ああっ、どうぞ」と返事して、思わず固まった。なんと親会社の森山（もりやま）監査役だ。
水村が恐縮していると、森山氏は彼の横に座って「僕はこれが好きでねえ」などと言いながら、アジフライをついばみ始めた。
「水村さんだったね。どうです、会社の方は？」
一度も話したことがないのに名前を知っていた。
「まあ……ぼちぼちです」
「ぼちぼち！」
彼は「ははは っ」と笑って、「ずいぶん苦労しているようだね」と、身を乗り出して来た。そして「前の皮崎君も困り者だったが、今度の川本君にも問題があるね。人はいいんだがねえ……」と、なにもかもわかっているようなそぶりを見せた。
「はあ、会議費が多くて……」
「会議費……。そんなに会議なんかしているの？」
水村は話していいものかどうか迷った。（これ、チクリというやつじゃないか）と気がとがめたが、『言え！　言っちまえ』という内心の声に押されて、ぽつぽつと切り出した。
「実は……こういうことが、日常になっていまして……」
一通り話し終えると、彼は「そう」とあまり驚いた様子を見せな

かった。

（この人、すでにどこからか聞いている）

水村は確信した。会社には反主流派がいる。原島たちの行動をよく思っていない者が耳に入れたのだろう。

監査役に事情を話した（チクッた）日の翌月から、川本社長の飲食費が目に見えて少なくなった。親会社から忠告されたのだろうか。原島や井林はなにも言わなかったが、あれ以来、彼らの水村を見る目が冷たくなったような気がする。

ルーンの飲食代は少なくなったが、代わりにエンマ工業への支払いが多くなった。工場などの機械設備の大部分をエンマに発注している。

これは予想していた。エンマ工業から高額な値段で購入し、その市場価格との差をリベートとして原島や井林が受け取っているに違いない。その金をルーンの飲食代にあてているのだろう。

ところが、これも続けられなくなったようだ。ある日、経営会議の席上で、工場長がこの取引を激しく糾弾したとのことだ。それ以後、エンマ工業は大口納品先である工場から締め出されてしまった。

お金がなければ、もうルーンへは通えない。どうするつもりなのだろう。（まさか社員互助会の積立金を流用しっぱなしにするのでは）と思っていたら、別の手を使って来た。

「なに、仮払（かりばら）い？　それも百万円！」

申請書には川本社長と原島常務の印鑑が押してあったが、肝心の使用目的が『業務』と記入してあるのみで、他にはお金の振込先（川本社長の個人口座）が書いてあるだけだ。

仮払いとは出張など会社の業務をするのに、まだ金額が決まっていない出費をいうが、使用目的などは詳細に報告する規則になっている。

後ろの席を振り返ると、経理部長を兼ねている常務の原島は大きなデスクにふんぞり返って小説を読んでいた。彼は自分の席にいる時にはいつも時代小説を読んでいる。特に戦国ものが好きで、甲斐の武田信玄に心酔しているとか。

水村は彼の席に行って申請書を見せ、「これには単に『業務』としか書いてありません。仮払い申請書には、出張なら、どこになにをしに行くか、接待なら誰と会うのか、使用目的を細かく書くことになっています。こんなのでは、経理としてお金は出せませんよ。もっと詳しく書いてもらえませんか」とかなり強い調子で意見した。

すると原島は小説から目を離して、「使用目的？　そこに『業務』とあるだろう。それで充分じゃないか」とつっけんどんな返事をした。「それでも……」と粘っていると、彼は荒々しく立ち上がって水村を睨みつけた。

「それは、社長が会社の仕事をするために必要としている金だ。社長が使うんだぞ、社長が！　社長はこの会社の最高責任者なんだ。『なんに使うか』だって？　そんなこと、一介の使用人が考えることではない。君は黙って金を出せばいいんだ！」

原島は顔を真っ赤にして、読んでいた小説を机に叩きつけた。

上司である経理部長の命令なので、それ以上反論することができず、不承不承、その金を出さざるを得なかった。

だが、水村が予想していたように、仮払いという形の出費はその後も幾度か続いた。さすがに百万という大金ではなかったが、二十万、三十万と小出しに申請書を出して来る。そして、出費したそれらの仮払金は一度も精算されることなく、たちまち五百万円を超えた。

気になるのは、その申請書は全部ワープロで打ったもので、申請者欄に川本社長の印は押してあるが、作成者（たぶん井林）の印はない。そして、いつも決裁欄に堂々と押してある原島の印は、右下の端にちょこんと見えるだけだ。

そんなある日のこと、水村がパソコンのメールをチェックしていると、親会社から一本の伝達事項が入っていた。発信者は森山監査役だ。

「ええっ！　業務監査（ぎょうむかんさ）？」

水村は驚いた。

業務監査とは、親会社が五年に一度のローテーションで行う定期監査で、主に不正行為がないかを調べるものだ。前回は二年前だった。

定期といっても問題のない優良な会社は十年間ないこともある。

（早い、まだ二年しか経ってないのに……）

しかも監査役は、あの森山さんだ。

（あれが原因か……）

水村はこの前の決算説明会の折、森山氏と昼食を共にしながら、川本社長らの不正行為を愚痴ったのを思い出した。

メールの連絡事項には監査日程とか準備して置くことが、ずらりと書いてあった。それによると、監査は二週間後から約五日間行われる。それまでに成すことの一つに、『仮払いの整理』というのがあった。監査までに、残っている仮払金を精算しろというのだ。それに今回は会社の書類ばかりでなく、社員互助会の帳簿も確認するとあった。

水村は連絡書に監査役からのメールを添付して各部署に回した。慌てたのは社長の川本で、さっそく原島と井林、それに、なぜか水村の部下である古橋も呼んで、社長室でヒソヒソと長い密談をしていた。

監査まで二週間しかない。五百万円の仮払金をどう処理するのだろう。一口に仮払いの精算といっても、それには使用目的に適合した正

規の領収書が必要だ。クラブの『ルーン』では、もはや通らない。それに、今回は互助会の積立金を一時的に流用することもできない。

連絡があってから、たちまち二週間が過ぎた。メールにあった準備事項は大方達成できた。川本社長の仮払金を除いては……。

その仮払金も、領収書のいらない電車賃とか、販売先の書いていないスーパーのレジ伝票とかで、少しずつ精算して来た。その中には、どう見ても川本社長や原島ら個人の出費だとおぼしき領収書も散見された。それでも、まだ三百万円が未精算として残った。

それらの仮払金は監査の最終日に激しく追及された。なにに使ったのかという監査役の質問に、川本社長はしどろもどろ、青くなったり赤くなったりしていた。だが、仲間であるはずの原島や井林は、「急な用事ができた」とか言って、どこかへ出かけてしまった。

だが、同じ親会社の者同士、これ以上暴きたてて自分たちの会社に跳ね返ってはまずいと思ったのか、監査役は川本社長に厳しい忠告をするに留めた。

「では、このことは、今回は保留にしましょう。ただし来月の期末決算までにはキチンと精算して下さいよ。さもないと、公認会計士の承認が得られません。つまり決算ができないのです。ここと親会社は連結(れんけつ)を組んでいますから、この会社の決算ができないと、親会社の決算も締められません。民間会社とはいえ、証券取引所に上場している企業は、期限までに決算を開示(かいじ)する義務があります。そうしないと、上場が取り消されるのです。上場廃止となれば会社は倒産するかも知れず、事はあなた一人の問題ではなくなるのですよ」

監査役の真剣な表情に、川本社長は「すみません、すみません。決算までには、必ずなんとかしますから」と幾度も謝っていた。

「なんとかするではなく、必ずやって下さいよ」

厳しい言葉を残して監査役は立ち上がった。今回の監査はこれで終わりらしい。社長と水村は監査役一行を廊下に送り、エレベーターのドアが閉まるまで何度も頭を下げた。

事務所に戻る時、川本社長は「仮払いの件、どこから漏れたのかなあ……」とつぶやいて、チラリと水村の顔を覗いた。水村は内心ひやりとしたが、知らぬふりを通した。

結局その日、原島たちは会社に戻って来なかった。

3

業務監査が終わってから、彼らに少し変化が現れた。いつもは就業

時間を待たずに四人そろって会社を出ていたものが、なぜか毎晩定時まで残っている。朝も皆と同じ時間に出社するようになった。それに、原島も井林も、川本社長とは最近行動を共にしていないようだ。あれだけべったりくっついていたのに。

仮払いの残金は決算間際になって、川本社長が精算した。それも、そっくり現金で返して来た。これで一応決算を締められる状態になったが、三百万もの大金を一体どこで調達したのだろう。

期末決算に入ると水村と二人のＯＬは毎晩遅くまで残業をするようになった。だが経理部長の原島は終業のベルが鳴ると、「じゃあ、そういうことで」と、訳のわからない言葉を残して事務所を後にし、井林と古橋もすぐについて行く。だが、その中に川本社長は交じっていない。彼は原島たちが姿を消してから、一人で出て行くようになった。

そんなある晩のこと、水村ら三人が決算の締めを急いでいると、隣に机を並べている総務部の電話が鳴り出した。今時、総務には誰もいない。係長の前田も井林たちが事務所を後にすると、早々と退社してしまった。衝立の向こうには、まだ営業の連中が何人かいるようだが、よその部にかかって来た電話を取ろうなんて親切な者は誰もいない。

電話は鳴り続けている。水村が根負けして手を伸ばしかけた時、愛子さんが（まったく！）という顔をして受話器を取り上げた。

「はい、両国フーズですが、どなた様でしょうか？」

迷惑そうな顔をしているが、応対だけは丁寧だ。

（年の功というやつか。この人も、入社して十年になるからなあ……）

愛子さんの端正な横顔を眺めながら感慨に耽けっていると、彼女が急に困惑した表情を見せた。

「えっ、えっ？　なんでしょうか？　はあ、お金ですか。誰が返してくれないんです？」

そして水村の方を向くと、「課長、変な電話です。若い女の声で、お金を返してくれと言っています」と不思議そうに顔をかしげた。

「女……金……？　いたずら電話じゃないのか」

水村は嫌な感じがした。それでも困った様子の愛子さんを放っておけず、電話を回してもらった。

「はい、代わりました。経理の水村ですが、どういう御用件ですか」

応対すると、確かに若い女の声が返って来た。

「カワモトさん、お金返してくれないです。それでワタシ、会社まで取りに来ました。カワモトさん、いますか？」

意味はわかるがアクセントが変だ。相手は外国人だとすぐわかった。

「カワモトですか。社長の川本なら、もう退社いたしましたが」

水村は、はっきりとした発音で答えた。
「タイシャ……？　カワモトさん、いないですか」
「はい、今日は帰りました。今は、もう会社にはいません」
「ソレ、困ります。ワタシ、カワモトさん、お金、貸しました。返して下さい。今、ワタシ、会社のソバいます。すぐ行きます」
「えっ、これから、いらっしゃるのですか。川本はいませんが。もしもし、もしもし……」
電話は切れていた。
「大変だ！　愛子さん、渡辺さん、川本社長のケータイに電話して、今すぐ本社に戻るように言って。あっ、それから常務と井林君にも電話を入れといて。借金の取り立てに、これから誰か来るって」
水村が慌ただしく二人のＯＬに指示を出し終わるか終わらない内に、入口のドアを乱暴に開ける音がした。事務所の中に、黒いスーツを着た厳つい男と、少女のように可愛らしい女が入って来た。
騒ぎを聞きつけたのか、営業部の面々が衝立の奥からどやどやと現れる。その中には住田の大柄な姿もあった。
「ミズムラってえのは、誰や！」
いかにも取り立て屋といった感じの男は、その場にいる社員たちを見回して凄んだ。愛子さんは受話器を握ったまま固まり、渡辺さんは「きゃ！」と叫んで、衝立の奥に背中を丸めた。
水村は、このヤクザ映画もどきの場面に足が震えたが、周りの営業部の男たちを見やって、いくらか落ち着きを取り戻した。
「水村は私ですが、なにか……」
意を決して前に出る。
「おお、あんたが経理やっとるミズムラさんかいな」
男は水村に目を向けると、口元を歪めてニヤリと笑った。
「なら話が早いわ。電話で聞いたやろ、早よ、金返してや」
関西弁かなにか、よくわからない言葉を発しながら詰め寄って来る。住田がすっと割り込んで、男の前に立った。
「なんだあ？　ワレ！」
男が住田を見上げるようにして威嚇する。でも威圧感なら住田も負けていない。今にも殴り合いが始まりそうな雰囲気になった。
「まあ、まあ、まあ」
ここで暴力沙汰はまずいと、水村は止めに入った。
「まあ、ここではなんですから、応接室の方へどうぞ。とにかくお話をお伺いしましょう」
間仕切りで作られた奥の部屋に二人を通した。彼らを案内しながら、横目で住田に同席を求める。

狭い部屋に二人ずつ向き合って座った。男と住田は睨み合ったままだ。ドアの外には何人かの社員が聞き耳を立てている。

「ワタシ、リリィいいます。ルーンのお店で働いてます。カワモトさん、親切。でもカワモトさん、お金、返してくれない」

リリィと名乗った女性はたどたどしい日本語で話し始めた。丸ぽちゃの顔をひきつらせ、大きい瞳をくりくりさせながら、さかんに訴えて来る。なるほど可愛い。少女趣味の男なら情感をそそられるだろう。

「川本社長に、いくらお金を貸したのですか」

「いくら……ああっ、オカンジョウのことね。サンビャクマン円です」

「三百万！」

「カワモトさん困ってた。三百万円、貸してくれ、言いました。カワモトさん、ワタシと結婚する、言いました。ワタシお金、お店から借りて、カワモトさん渡しました、でも、カワモトさん、結婚の約束守らない。お金、返してくれない。ワタシ怖い。お金、返さない。お店の人怒る。ワタシ、お店、いられません」

リリィはその可愛らしい顔に必死の表情を浮かべて懇願する。その横顔を、取り立て屋が冷酷な表情で見つめていた。その様子は、まるでリリィという女を値踏みしているかのようだ。たぶん、この男は貸した金を取り戻せなかった場合のことを考えているのだろう。

（おそらく、この子を売り飛ばすつもりだ。外国かどこかへ）

そうなれば、この可哀想な女は生涯をセックス奴隷として終わることになるだろう。何千という男たちの精液を受けながら……。

水村はできることなら三百万円を出してあげたかった。だが、これは川本社長の個人的な借金で、会社とはなんの関係もない。リリィにその区別はわからないのだろうが、この男は充分承知しているはずだ。それでも、ダメ元で取り立てに来ているのだろう。

「リリィさんとやら、あなたは勘違いしている。このお金は川本さん個人に請求しなさい。会社は関係ない。このことは、お隣のあんたにはわかっていると思うが」

同席していた住田が初めて発言した。だが彼の顔はリリィではなく、取り立て屋の方を向いている。「えっ？」と隣を覗うリリイ。

「そりゃ違うがな。川本ハンはここの社長だろう。私らは、川本ハンがこの有名な会社の社長サンやさかい貸したのや。つまりやな、これはこの会社の借金や。早よう返してや三百万。でないと言いふらすで。『両国フーズは借りた金も、え返さん。潰れかけとるで～』てなぁ」

男はタバコを口にくわえて火をつけた。そして、その煙をぷかぷか

と住田に吹きかける。
「なにをする！」
住田が怒って立ち上がる。だが男はタバコをくわえたまま、薄ら笑いさえ浮かべていた。
しばらく住田と男の睨み合いが続いた。
「なにをしてるのだ」
その時、入口のドアがサッと開いて、縞模様の黒いスーツを着た初老の男が入って来た。
「カワモトさん！」
リリィが救われたように立ち上がり、川本の前にすっ飛んで行く。
「リリィ！」
川本社長は驚いたように声を上げると、「君だったのか……」と困惑した表情で呟いた。
「社長！」
水村もリリィに劣らず救われた気持になった。社長の座る席を開けようと急いで立ち上がる。
だが川本社長は「水村君、住田君、ちょっと……」と、二人を部屋の外に連れ出した。
「事情はわかった。これは私個人の問題だ。ここは任せてくれ」
彼は（これ以上関わるな）という顔をしていた。そして事務所に残っている社員たちに、「君たちはもういい。帰りなさい！」と強い調子で言い放つと、一人で応接室に入って行った。
だが、水村は管理部門の自分が、社長一人を怪しげな人物たちの中に置き去りにするわけにもいかず、部下のＯＬ二人を急いで退社させると、そのまま居残って仕事をしていた。
営業部には住田と二、三人の男性社員がいた。もっとも、こちらは仕事をするというより、社長のトラブルに興味があるようで、さかんに応接室に目をやっては、ヒソヒソ話に精を出していた。
社長と取り立て屋の『商談』は延々と続いた。もう日付が変わる時刻になって、彼らはやっと応接室から出て来た。事務所を出る時、男は強面の顔を社長に向けて凄んだ。
「三日後だぞ、あんさん。今日から三日以内に、三百万円、耳を揃えて持って来ぃや。さもないと親会社に行くでぇ。元禄の社長に直談や。そしたら、あんさんの身分は、どうなるかわかりまへんなあ……」
彼は不気味な笑いを残すと、リリィを連れて会社から出て行った。
その時、事務所には水村と住田がまだ残っていたが、青白く憔悴した様子の社長は彼らに声をかけることもせず、そのままエレベーターに乗り込むと、頭を垂れて下りて行った。

水村と住田は急いで事務所の戸締りを済ませ、会社のビルを出た。夜の街を早足で両国駅に向かう。まだ終電には間に合うだろう。

結局その晩、愛子さんと渡辺さんが連絡したにもかかわらず、原島と井林は姿を見せなかった。

その翌日も、その次の日も、金策に駆け回っているのか、川本社長は会社を休んだ。

ところが、あれだけ社長にべったりくっついていた常務の原島も総務部長の井林も、さらに古橋も、皆きちんと出社している。子細は聞いているはずだが、彼らに社長を心配している様子は見られなかった。

期限の三日目が終わる頃になっても、川本社長は姿を見せない。借金は返したのだろうか。

「社長は、どこかに出張でもされたのですか？」

水村は心配になって（自分が気にすることでもないとは思ったが）後ろの大きな席で小説を読んでいる上司の原島に聞いてみた。

「社長……。ああ、この頃見えないね。ゴルフにでも行ったんじゃないのか。オレ知らないよ」

そっけない返事だった。隣で聞いていた井林は薄笑いを浮かべ、帰り支度をしていた古橋は顔をそむけた。その様子に、愛子さんと渡辺さんの顔が嫌悪に歪んだ。

（いつも一緒にいたくせに、いまさら『知らない』もないだろう。こいつらは自分の都合が悪くなるとすぐ逃げる）

その晩、彼らが帰った後、水村と住田は伊賀屋に寄った。

「実は新宿営業所の拓が見たんだ。今日、代々木でウチの社長を」

生ビールをあおりながら住田は話し始めた。

「代々木？　あっ、もしかしてエンマ工業！」

この前まで会社に出入りしていたエンマ工業の本社は代々木にある。

「拓はあの辺りが配送コースなんだ。不審に思ったやつはエンマの近くにある店に荷を降ろした時、おやじに聞いてみたんだと、『ウチの社長を見なかったか』って。そしたら、おやじは『ここ毎日、あんたとこの社長を見た』と答えたらしい。昨日なんか、エンマの玄関先に二時間ばかり立っていたそうだ。挨拶しようかと思ったが、ぎらついた目をしていて、とてもそんな雰囲気じゃなかったってさ」

「それ、借金申込だな。ルーンに返す金を借りに行ったのだ」

「まあ、そんなところだろう。だが二時間も待たせるようじゃ貸すつもりはないな。おそらくエンマの社長は逃げ回っているんだろう」

「期限は今日だな。今、七時だから、あと五時間か、大丈夫かなあ」

「無理、無理。もうエンマとは取引できないのだ。先方は、もうウチ

の社長にへつらう必要はない。金の切れ目が縁の切れ目よ」
住田は早々と大ジョッキを空にして、今度は水割りを頼んだ。
翌日も社長は出社しなかった。おそらく借金は返せなかったのだろう。原島や井林は接待ゴルフで会社を留守にし、部下の古橋は祖母が危篤（？）とかで有給休暇を取っている。
水村はなにかが起こりそうな嫌な予感がした。頼りの住田は得意先回りで今日一日本社にいない。
それは昼過ぎのことだった。昼食を外で済ませた水村が早めに会社に戻ってみると、社内が異様にざわついていた。目つきの悪い連中が四、五人事務所の中をうろついて、「川本を出せ！　水村はどこに行った！」と怒鳴っている。その声を聞いて、水村は腰の萎える思いがした。いつの間にか、この自分が当事者の位置に立たされている。
水村が恐る恐る事務所にはいると、幾つかの鋭い視線にサッと捕えられた。思わず身体が硬直する。
「お前が、川本か！」
身体が冷蔵庫のように角張った大きな男が、水村の前に立った。
「い、いえ、違います。社長は……。今日は休んでおりまして……」
水村は腰を引きながら、つっかえつっかえ言葉を絞り出した。足が出口に向かおうとするのを必死に抑える。
「川本にしては若すぎると思ったが……そうか、お前が水村だな。ここの金庫番の、水村だな」
男は確信したように言い切ると、その厳つい顔を近づけた。
「では金を返してくれるんだな。お前んとこの社長に貸した金、三百万、今すぐ渡してくれ。俺たちゃ忙しいんだ。早くしろ！」
彼は手の平を前に出して水村に催促した。
「そ、それがですね、川本社長がつかまらないんです。だから、お金がどうなっているか、わからないんです……」
「なにっ、川本がいねえから、わからねえだと！」
男は顔を歪めて凄んだ。今にも胸倉をつかまれそうだ。
「川本がおらんでも、お前がいるだろう。さっさと出せよ、三百万。そこの金庫にあるんだろうが！」
彼は経理部の金庫を指差した。弟分だろう一人の男が金庫に近づき、取っ手をつかんで引き開けた。傍にいた愛子さんが、「なにするんですか！」と、男の頭を拳骨でぶん殴る。
「なにしやがる！」
殴られた男が片手を振り上げる。隣の渡辺さんが「きゃー」と叫んで逃げ出す。だが愛子さんは平然としたもの。「この泥棒！　警察を呼ぶよ」とケータイを出して一一〇番をプッシュする。

男は相手が女だとわかると一瞬躊躇したが、やがて振り上げたこぶしを下ろした。そして、キツネのような頬に薄笑いを浮かべた。
「おお、元気のいいお嬢ちゃんじゃねえか。今のは痛かったなあ。痛かったよ、ホント。これ暴行罪だよな。ボク、お嬢ちゃんに慰謝料請求しようかなあ」
男はなぶるように愛子さんを眺めると、彼女から携帯電話を取り上げようと手を伸ばした。
「うるさい、お嬢ちゃんなんて言うな。この盗人が！　突然侵入して来て金庫を開けるとは、キサマらは泥棒だ。つかまるのはお前たちだ。いさぎよく縄につけ！」
愛子さんはケータイを取られまいと、腕を振り回しながら、多少時代がかってはいるが、男顔負けの罵声を浴びせた。
「なんやて！　このアマ、言わせておけば」
男たちの顔つきが変わった。三人の男が彼女を取り巻く。愛子さん、絶体絶命のピンチか……。
その時、入口のドアが荒々しく開いた。
「なに事だ。これは！」
大きな声がして、小柄でタフな男と、背の高い四十代の男が事務所に入って来た。親会社、元禄商事の中山部長と部下の秋吉課長だ。この二人は子会社を監督する統括部に所属している。中山氏はその総責任者。その権限は子会社の社長を優に超える。いわば、彼がこの両国フーズの事実上の社長なのだ。

やや広い会議室に、テーブルを挟んで六人が相対している。真ん中に中山部長。その左右に秋吉課長と水村が掛け、前の席に取り立て屋三人が座っている。他の二人は会議室の外で、社員たちを威嚇するように、のそりのそりと歩き回っている。
「私らは、なにもこの会社を恐喝しに来たのじゃありません」
「カトウ」と名乗った強面の男が相好を崩して中山氏に説明を始める。先ほど社員たちを威嚇した凶暴な態度はどこへやら。相手が一部上場企業の役員と知るや、手の平を返したように礼儀正しくなった。
先日の取り立て屋が脅した通り、親会社に返済の催促があったそうだ。これが本当なら子会社の不祥事は統括部の責任となる。連絡を受けた中山部長が驚いて飛んで来たのだという。
カトウ氏と中山部長の話し合いは延々と続いた。だがさすがにこれでは埒が明かないと思ったのだろう、少しずつ妥協案を出して来た。つまり分割弁済というやつだ。毎月十五万円を二十か月で返済するという契約書を、ルーンと川本氏との間で取り交わすことになった。そ

の手続きは親会社の方で対処し、中山部長がその窓口になることで先方も納得した。彼らはもうここに姿を見せることはないだろう。

男たちが帰った後、いつもは元気バリバリの中山部長がいかにも疲れたという顔をして、よろよろとした足取りで事務所を後にした。すぐに秋吉課長が付き添う。水村は彼らをエレベーターの所まで送った。

「川本君は真面目なやつなんだが……それだけに怖いねえ。初めて遊んだ女にいかれっちまって……」

彼はそう呟くと、「それに取り巻きが悪い。まったくあの連中は！」と吐き捨てるように言った。そして水村をちらっと見て「君も大変だねえ」と同情するような言葉をかけて来た。

川本社長はその後ついに会社に姿を見せなかった。原島や井林はゴルフ焼けした顔で会社に出ていたが、その件についてはなにも語らなかった。部下の古橋も祖母の危篤状態（？）が治ったとか言って、なに食わぬ顔で出社して来た。

4

月が替わって六月、親会社の人事異動があり、川本社長は九州の子会社に転勤（左遷）になった。一方、統括部の中山部長も別の部署に異動になっている。事件の責任を取らされたのだろうか。

翌月、新しい社長が親会社から出向して来た。そして会社は、また何事もなかったように回り始めた。

そんなある日のこと、水村はいきなり社長室に呼び出された。なんだろうと部屋に入ってみると、そこには新任の増田（ますだ）社長と常務の原島が待っていた。

「経理という部署は、実に目立たない縁の下の力持ちだ。それにもかかわらず、水村君、君は実によくやってくれている」

冒頭、原島がそう切り出した。水村は嫌な気がした。こいつに褒められた経験なんて一度もない。

「君は、もう何年経理部に所属しているのかね」

「えーっと、入社してからですから、かれこれ三十年になります」

「三十年！」

知っているはずなのに、原島は大仰に驚いて見せた。

「三十年も同じ所にいたら、尻に根が生えるね」

彼は隣の増田社長にチラッと目をやってから続けた。

「どうだろう。君も、もうそろそろ部長になってもよい年だと思うが、残念ながら我が社も不況でねえ。これから大幅に部門のリストラをや

らなくちゃならないんだ。それで、管理部門でも、二つある部、つまり総務部と経理部をだね、一つにすることになった」
原島は実に言いにくそうな顔をした。
「えっ？　一つにする……。仕事が違うのに」
「昔はね、社内牽制のために経理は独立した方がよい、ということだったんだが……時代が変わって、そんな悠長なことを言っていられなくなった。そこでこの際、統合することにした。つまり、合理化の一環だね。その部門は管理部と名づけるのだが……その部長は……総務部長の井林君にやってもらうことになった」
彼は水村の顔を窺うように下から見上げた。
「井林……ですか」
（自分の席がなくなる……）
頭の中が白くなるのを感じた。
「そこでだ、君にはもっと広く世間を知って、経営者としての見識を勉強してもらいたくてねえ、この際、子会社に出向してほしいのだが」
「子会社に出向？」
（ここには、子会社なんてなかったはずだが……）
首をかしげていると、社長が補足した。
「この両国フーズのではない。親会社、元禄商事の子会社だ。親会社はこれから水産部門に乗り出す。そこで、先月、築地にある大正食品の子会社を買収したのだ。まだ小さな会社に過ぎないが、やりようによっては、ここにも劣らない大きな企業になるだろう。君はそこの経理全般を任されるのだ」
「小さいって、従業員は何人ぐらいですか？」
水村が質問すると、隣の原島が小さな声で「十五人」と答えた。
「十五人！」
「十五人でも立派な一つの会社だよ。部門だって、仕入、営業、業務と三つあるが、今度は君のため特別に、経理室というのを作ってもらった。君はその室長になるんだよ」
原島はことさら『室長』というところを強調した。
「社員十五人の会社……つまり、左遷ということですか」
水村がそう切り込むと、原島は「とんでもない！」と声を荒げた。
「君が長年ウチに貢献して来たことは、誰もが知っている。我々も、今君を手放すのは辛い。でもこれは君にとって非常なチャンスなのだ。断じて左遷などではない。それに、これはもう決まったことなのだ。君が嫌だと言っても、どうしようもないのだよ」
原島は水村を睨むように胸を反らした。
呆然として黙り込んでいると、増田社長が身を乗り出した。

「私もよく考えたのだがね、ここにいるより、そこに移った方が君にとっていいと思うよ。それに、この話は親会社の水産部から出た話なんだ。そこの部長は、ほら元統括部長の中山さんなんだが、君のことをとても気に入っていてね、ぜひ欲しいと言って来てるのだよ。望まれて行くのだから、いい話じゃないか」

社長は「ぜひ、行きなさい」と真顔で押して来た。

そこまで言われては、承諾せざるを得なかった。もはや、ここに自分の居場所はないのだ。

水村は憮然として自分の机に戻ると、せっせと荷物を片付け始めた。

愛子さんと渡辺さんは心配そうな顔を見せていたが、総務部の井林は薄ら笑いさえ浮かべていた。部下の古橋はどこに行ったのか、姿も見えなかった。

その夜、両国のとある飲み屋から三人の男が出て来た。その一人、小太りで頭てっぺんが禿げあがった男は完全に酔いが回ったのか、よたよたと足取りもおぼつかない。

「常務、常務、しっかりして下さい。寝ちゃあだめですよ、寝ちゃあ」

大きな眼鏡をかけた男が、赤ん坊をあやすようにぽんぽんと背中を叩く。常務と呼ばれた男は、いやいやをしながら彼の手を払いのけると「井林君もう一軒行くぞ。今度は銀座だ！」と声を張り上げた。

「常務、もうよしましょうよ。こんなに酔っ払っちゃって。あっ、危ない。古橋君、そっちを持って！」

井林と古橋があわてて彼を支える。

「なあに、今日はめでたい日だ。構うものか。どうせ飲み代は会社もち。パアーッと行こう、パアーッと」

彼は両脇を支えられながら、得意の武田節を熱唱し始めた。古（いにしえ）の武田武士団出陣場面を高らかに歌い終わると、古橋に目を移して、「いよう、おめでとう経理課長！」と彼の頭をポンと叩いた。すると古橋は「常務、僕は課長じゃないですよ。係長ですよ」と拗ねたように顔をしかめた。

「俺はな、ちゃんと課長に推薦したんだ。でも、社長が二階級特進はまずいと言うので、しかたなく係長だけの昇進になった。だが、実質上の課長は君だ。先輩に佐藤愛子がいるが、女ではダメだ。すぐヒステリーを起こすからな。その点、君なら大丈夫」

原島は太鼓判を押すように、何度も「大丈夫」を繰り返す。そして、それでも不満そうな古橋を宥めるように、彼の肩に手を置いた。

「なあに、心配するな。来年は必ず課長にする。今度の社長は堅物だが、近い内にわかってくれるよ。いや、わからせるよ。そのためにも

実弾が必要だ。水村みたいに細かいことを言わず、どんどん出してくれよ。必要な時には、ドンと使わなくちゃ」

原島はそう言うと、ドンと古橋の胸を突いた。

「しかし川本さんには参ったなあ。途中まではいい按配に事がはこんだが、まさかあんな飲み屋の女に狂うとは。取り立て屋が出て来た時には、さすがの俺もヒヤッとしたぜ」

「常務、ここは会社の近くです。誰が聞いてるか、わかりませんよ」

横から井林がたしなめる。

「なあに、聞かれて困ることなんかあるもんか。俺たちゃ会社の金と人事を握ってるんだ。たてつく者なんていやしない。我らは永遠、絶ゆることなし。これからはどんどん行こう。ドンドコ、ロン！」

彼は自分で言った「ドンドコ、ロン！」がよほど面白かったのか、身体をくの字に曲げて大笑いを始めた。「常務、常務」と諌める声もどこ吹く風、両国の静かな裏街に原島の哄笑がいつまでも響いた。

（了）

（この物語はフィクションです。登場する個人、団体等は、現実の個人、団体等と一切関係ありません）

【編集後記】

『文芸 草の丘』を創刊して一年余り経過したが、若手が増えてきたことが喜ばしい。冒頭の作は土方 杳が短期間で仕上げた短編であるが、子育てのかたわらに創作する意欲に敬服。いんば華子は前号に引き続き若者の心象世界を瑞々しく描く力作を発表、中川とら は夭折した友へのレクイエムと心温まる童話を書き上げた。

唐瀬 光の「続太鼓持ち」は、パラサイトのように会社にはびこる男たちを達筆で描いたが、人間の醜さと弱さとが読む者に迫ってくる。

香取 淳のＳＦは、この作を発想した下北半島（牧場でのんびり草を食む牛馬とその入口に県食肉増産組合の大きな看板）に舞台を移して、人間が家畜化されるプロセスを描いた。

豊かな自然に恵まれた地で、私たちはさらなる意欲作に取り組んでゆくが、志を一にする方の入会を期待してやまない。

（淳）

草の丘　第3号

発　行　二〇一二年 一二月一六日

編集兼発行人　印旛文学の会 香取　淳

連絡先メール katorijun27@gmail.com

ＵＲＬ http://bungeikusano-oka.raindrop.jp